大和名所圖會

葛上郡 宇知郡 高市郡

五

和書門 類 八六六 號 九五 函 六 架 七 冊

内閣文庫 和 書 類 八二三〇 號 七 冊 七二函 一七 架

内閣文庫
番號 和 8660
冊數 7（5）
函號 172 207

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館 National Archives of Japan

大和名所圖會巻之五

葛上郡　宇知郡　目録
高市郡

葛城山　高天寺　極樂寺　故葛木寺　風森　高鴨社　水分社　茅原寺　池心宮　巨勢路
一言主社　蜘蛛窟　船丘　伏見社　櫻井　御歳社　高丘廟　孝安天皇陵　葛城川　今木雙墓
石橋　高天彦社　朝妻山　菩提寺　細井　多田社　橿原宮　白鳥陵　巨勢社　大穴持社
金剛山寺 朝原寺 石寺　松原井　葛木池　壺井　中位寺　長柄社　腋上嗛間岳　弾琴原　大倉社　身越川

鴨都波社　小明原　宝山　磐余若櫻宮　龍宮窟　小鴒城　月見寺　高天社　荒木社　良峯寺　宇智陵　二見社　中村社

来迎寺　千塚　吾妻社　阿多大野　榮山寺　宇野親治宅　王墓　一尾背社　宇智社　丹生川　火雷社　統社　安井寺

戒那山　重丘　室秋津嶋宮　阿陀社　後阿陀墓　龍池社　楢井　霹靂社　矢田畠笠辻　丹生川社　二見城　櫻井寺　上村城

鴨山口社　大重社　孝昭天皇陵　阿陀墓　菱原長岡宅　庶人墓　鳳凰寺　觀音寺　御靈社　吉祥院　多濃川　櫻井　神福山

大澤川　蓮華寺　落杉社　吉野川渡口　蘇武川　栗原井　石川廢精舍　廢大官大寺　廣巌寺　輕池　豊明宮　畝割塚　古墳　石燈爐　春井　飛鳥社　同井

佐太雄社　真土山　犬飼寺　狭嶺山　鴨事代主社　廢藥師寺　孝元天皇陵　豊浦池　難波堀江　廢輕寺　檜隈陵　厩阪　板蓋宮

大澤寺　戸立山　内大野　高市　秀泉井　田中宮　田見池　耳樫社　蘇我入鹿第　曲峡宮　廢川原寺　厩坂宮　同池　川原寺

楊貴氏墓　角田川　安日寺　國分寺　鷲栖社　馬立社　大野丘塔　味橿丘　小墾田宮　境原宮　橘寺　神名備山　飛鳥寺

飛鳥社
飛鳥川
雷丘
藤原
藤原宮御井
御陵山
氷室趾
加夜奈社
南淵先生墓
勾池
後園
遊岡
檜前川

遠飛鳥社
飛鳥里
矢釣山
大織冠第趾
衣通媛家趾
氷室趾
滑谷陵
金剛寺
龍福寺
真名池
逝回丘
倭彦命墓
於美社

飛鳥川宮
七瀬淀
八釣宮
法光寺
浄御原
和飢社
大仁保社
都塚
田麿第
嶋宮
岡本宮
鬼厠
欽明天皇陵

荒塚
大國社
大原
藤井原
細川山
浅茅原
南淵山
飛鳥川上社
呉津社
岡寺
治田社
鬼俎
文武天皇陵

子嶋社
五百羅漢石
子嶋寺
重阪川
真弓陵
宣化天皇陵
益田池碑銘
安寧天皇陵
畝火山
大窪廃寺
神武天皇陵
天高市社
太玉命社

霊鷲寺
曼陀羅石
竹阪
櫛玉社
許世都社
鳥坂社
久米社
綏靖天皇陵
畝火社
高市社
宗我都社
地黄邑
川俣社

高生社
鷹鞭山
波多社
真弓丘
齊明天皇陵
石椋小墾
久米川
久米寺塔中銘
懿徳天皇陵
井谷井
蘇我原
人麿社
稲代社

壺阪寺
高取山城
佐田丘
越智
巨勢山社
牟佐社
軽樹社
鬼頭田
娘子塚
御陵山
小綱邑
金橋宮
天神社

長法寺

法器山寺

菅丞相山荘

新古今
よそにのみ見てや
やみなん葛城や
たかまの山の
峯の白雲
読人しらず

葛城 日本紀曰神武天皇高尾張邑に土蜘蛛あり身短くて手足は長くして侏儒に相似たり官軍かつらの網をむすびて掩襲ひ殺しけるより葛城とぞなづけける

葛城山 葛上忍海葛下三郡の西に連り山の西は河州に隷す第一の高山なり高天山とも又金剛山ともいふ高サ二百丈山巓に一寺院あり山麓東は高天村 高天山にあり 日本紀曰欽明天皇元年五月龍にのりて虚空をかける者あり容貌中華人に似て青き油衣を着て葛城嶺より生駒山にはせかくり午の時に住吉の松嶺の上より西に向ひて馳去りぬ

又曰天武天皇九年十二月葛城山に麟角あり角の本二枝にして末合て完あり完の上に毛生たり毛の長さ一寸即異なりとて奉献る 又曰同御宇白鳳十三年葛城に四足の鶏あり

万葉 青柳のかづらき山に居る雲の立ても居ても妹をしぞ思ふ 人丸

後撰 玉かづら葛城山のもみぢ葉は面影にのみ見えわたるかな 貫之

金葉 夜はのはれけりまさにしるのとゆく葛木山に雲はかゝりて 俊頼

千載 葛城や高間の山の桜花雲ゐのよそに見てや過なん 顕輔

新古今 かつらきや高間の桜さきにけり立田のおくにかゝる白雲 寂蓮法師

新勅撰 みえはさまにしまた青柳の葛城山に霞たなびく 鎌倉右大臣

同 きゝとしゆく葛木山のいろとむ郡のまへやかすみこめけり 後京極

続古今 さくら花さきぬる時はかつらきの山のすがたにかゝる白雲 家隆

同 白雲や花よりうへにかゝるらん桜ぞたかき葛城の山 順徳院

同 葛城や高間の山の花さかり雲にまがふる雲ぞなかりける 有家

葛城山の和歌は廿一代集に七十三首あり

葛木坐一言主神社 森脇村にあり長柄豊田宮戸寺田多田五ケ村の氏神なり 寛文記曰葛城大明神は一言主とて女神なり なかつ川よりこの山の嶺に宮居し給ひしを今は其麓の田の中にうつしたてまつる 舊事紀葛木一言主神 倭國葛上郡にあり 坐す 足素盞烏尊神子なり 又天孫本紀曰火々出見尊十三万六千年に坐す 速刺利主神又一言主と云 日本紀曰雄略天皇四年天皇葛城山にかりしたまふ時一言主神と共に鹿をおひて轡をならべて遊び夕陽に及ぶの時田猟を罷て天皇を来目水に送りてかへり時に村民

こと〳〵く有徳の天皇と称賞じける 当社ハ延喜式神名帳出 一言主神ハ孔雀明王と号く 社記 葛城の神ともいへり定ハ拆一言主神ハ一説に大空道をするよ味鉏高彦根命なり 釈日本紀 葛城山の東下高宮岡上にひつて鎮座す雄略天皇御狩の時一言主神出て天皇と共に遊せまひて田しのへ天皇に嗔りて神を土佐國にうつしまゐらする其後天平宝字八年従五位上に叙せらる 土佐国にうつしめ給へるハ信用せざるよし旧説依てとるに足らず続日本紀にあらはせり 神階ハ貞観元年正月廿七日葛城一言主神を従二位に叙せらるよし三代実録にみえたり

拾遺 岩橋の夜の契もたえぬべしあくるわびしき葛城の神 春宮女蔵人左近

続古今 若ないのるは一言ぬし神の宮二つ猶あるかひはあるらん 加茂氏人

続後拾遺 ひ川しるの神を通ひてかならぬみゆる夏のうたし 贈従二位為子

夫木 身をうらなひとらかもや人契りける一言ぬしにまかせてけれる 顕昭

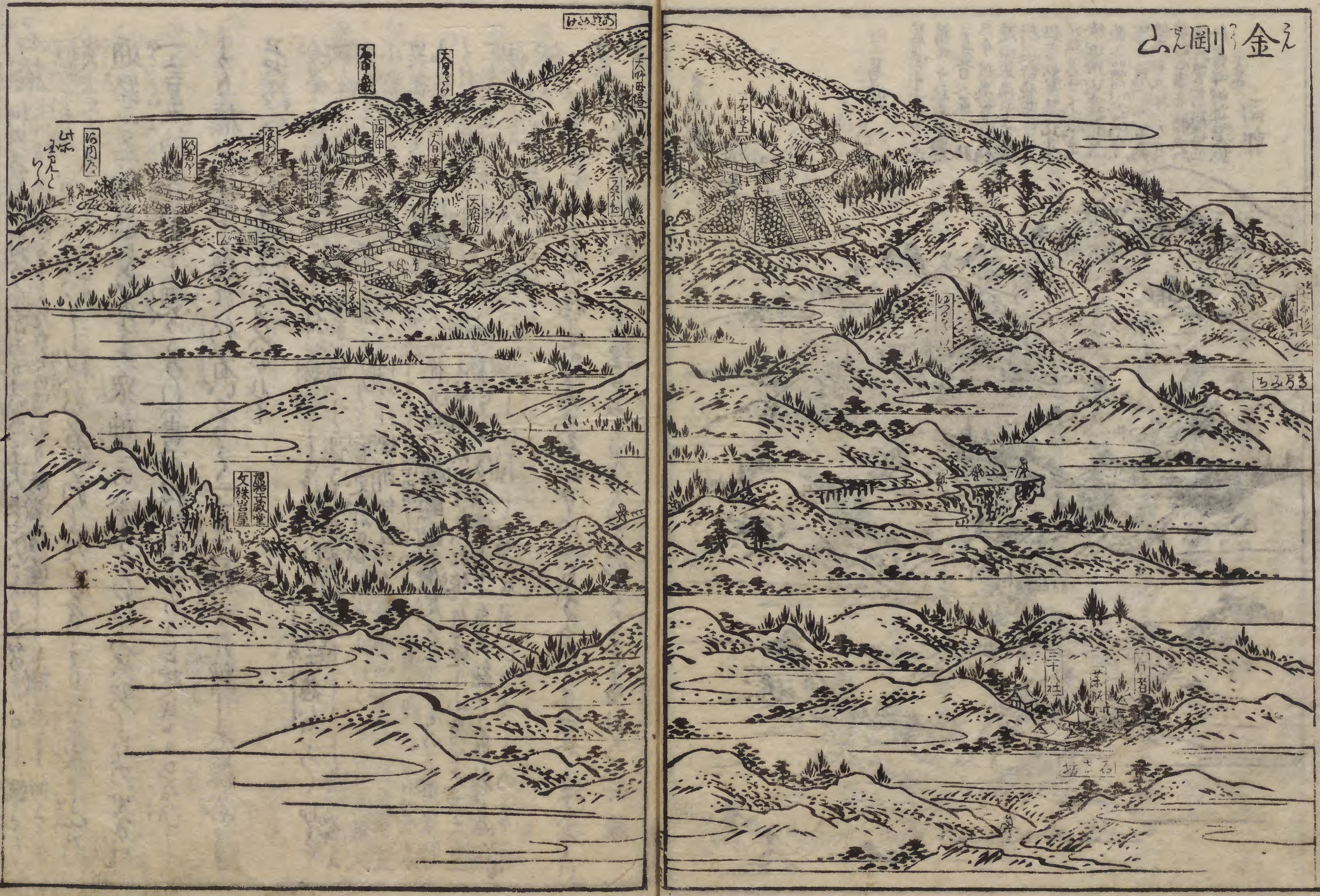
峯はとの雲とりて葛城山のへりしぞるはよきの花をさかりにてきそへみをそらの明月のけしきの社のさにやあしと人の口さかなく

猶かんしき花にゆかり神の顔 ちゝ成

望葛城山 古詩體

葛城山上白雲邊　萬古千秋白日懸
云是昔人飛升路　只今何處覓神仙
連山東南赴天嶽　拱如群帝朝中天
往昔妖星薄北斗　元弘天子下殿走
繚垣南山建行宮　給谷關門分隘守
曾是宸慶發鸞鴉　維南有木捧大日
英雄心事弟精忠　誰知管葛期儔匹
紆帯崢嶸據葛城

下略 南郭


金剛山
本堂
庚申
大日堂
文殊岩屋
三十八社

石橋 河内志曰平石村の山上にあり其廣さ五尺長七尺ばかり右の方にわたし銕より上には橋の架たるごとくにその跡四ツあり両端稍隆にして欄基あり加之形勢甚奇なり實に是天造なり

むかし役の行者といひし人の葛城の嶺より金峯山の通路に石橋をかけんとて衆神にこの命をうけしに一言主神容貌いと醜かりければ晝の役をはぢらひて夜のみつとめしより橋かゝらず役行者いかりて一言主神を咒縛して深谷に捨給へりける書々にみえ侍れど大意を述るのみ

金峯山記曰役小角は一言主神を縛繋し給ひければ一言主怒りて人に託して説して曰く役優婆塞は國家を傾んと謀ると文武帝勅を下して小角を召しむ小角怒りて空に騰て飛去けり官使計りごとをめぐらしてその母を捕ふ小角己ことを母の為に因はれ配所伊豆の大嶋に遠流せらる日本霊異記にも見えたり役行者葛木山に住して咒術をもて外從五位下韓國連廣足といへる人その小角が術を妬み帝に妖惑を吐きたれば遂に小角を文武天皇三年五月伊豆の大嶋へ配流せられける小角は能く鬼神を使して水を汲し薪を採らしむ若命を用ひざればこれを咒縛すとしるせり云云

古今 葛城やくめぢの橋にあらばこそおもふ心をなかぞらにせめ　よみ人しらず

後拾遺 中たゆる葛木山の岩橋はふみみることもかたくぞありける　お撰

千載 葛城や渡しもはてぬ物ゆゑにくめの岩橋苔おひにけり　師頼

同 かづらきやくめぢにわたす岩橋の絶えにし中となりやはてなん　能宣

續後撰 葛城や夜るの契の岩ならし明て通はぬたぐひなるらん　[illegible]

續古今 葛城やわたしも果ぬ岩橋も夜の契りはありとこそきけ　家隆

同 かつらきの夜の契りのかはらずもふみまよふくもは岩はし　匡房

續千載 葛城やくめの岩橋中たえて今は人の契なかりしは　冷泉太政大臣

新千載 山風に雲のゆききもやすらはん夜わたる月の葛城の山　[illegible]

同 わたるやくめ路の橋も中絶てわたしもはてぬ葛木の神　實方

舊事紀曰大瓊矛のさきより滴潮こりて礒馭盧嶋となる日本國の霊山はうちとゝつれ其霊山は金峯葛城峯なりと篡疏宝山記 神皇正統記云花嚴經曰東北海中有處名金剛山從昔已來諸菩薩衆於中止住現有菩薩名曰法起與其眷屬諸菩薩衆千二百人俱常在其中而演說法云云 是大和國の金剛山なり

新千載
後嵯峨院

支考

金剛山寺　葛城の山頂にあり大和志曰正堂一宇小祠二所在本州ニ屬ス其餘ハみな河州に隷す東北ハ則朝原寺東南ハ則石寺舊名諸石寺と一名神祇宝山又名一乗嶽峯又名金剛峯又名縛日羅嶽亦りハ酉誉記　又大日本日高見國　足ハ日神所化よりぶ名あり葛城宝山記

本堂ハ法起菩薩不動明王藏王權現の三尊役小角の所作なり

正月三ヶ日大晦日八大金剛童子に供物をそなふハ葛城に縁とらへとりひなり役行者自然涌現の十六童子をわかちて八大金剛童子を小遷し七大童子ハ葛木に遷しまつる第一經護童子　須弥頂佛垂跡一乗嶽　第二福集童子　師子相佛垂跡大福山　第三常行童子　常滅佛垂跡金剛山　第四集飯童子　須弥相佛梵相佛垂跡二上嶽嵓　第五宿着童子　度一切世間苦惱佛垂跡紅宿　第六禪前童子　垂跡般若嶽　第七羅網童子　玄自在佛垂跡釈迦留岳

開山堂　役行者の遺像あり六月七日法会あり修しその日護摩堂に常燈の護摩あり宗名直言にして弘法大師の御影堂大黒堂求聞持堂　辨財天社　文殊堂　石實殿　鎮守三十八所社等あり

金剛山ハ大和河内の堺にして今の本堂ハ大和の内九坊ハ河内なるよしされとも境内ハみな和州の内なりとぞ　寺ノ文大和ち社記小アるへかり

南遊紀行云　貝原篤信　葛城山ハ大峯の外嶽内より近國にて見経のまつ山ハなんぞ絶頂に葛城の神社あり大社なり一言主の神といふ役行者堂あり山上より二町西に下りて河内國金剛山轉法輪寺あり役小角の開基也是山伏の嶺入して修法をなす所也傍に六坊あり皆家作見事にて大和河内の農民此神を甚尊崇し社の下の土をとりかへりて我田地に入れば稲よく實るとて来る人参詣の人雑し皆宿坊あり宿をなす者多し檀那にあつかれて宿を借さしむ葛城の社ハ山の上にある頂上に在て大和國之金剛山の寺院ハ西の方なる所に在て河内なり葛城の社の下にて宗動ハなり是大和河内の境也葛城の山にある大山といふか嶽といへ河内に在り足をなれと號す篠峯を葛城山といへかくすなり葛城金剛ぶんに見えるる山ありと云

金剛山土産　桔梗あり　絶品　防已藤　あを刻て緒にし縄にも代へつる名物なりに出る

堀川二郎百首
明ぬるや木陰に
光る稲妻哉
山伏のうへに
火かとこそ見れ
兼昌

朝原寺 寛文記曰金剛山の本堂より卅八町坂中に
あり金剛山七坊の内なり 此寺に霊宝多くは役行者自
畫の絵大黒天像は伝教大師の作釈迦如来は春日の作田植乃毘沙門
此外いふしは良田かよへ拾ひし石像しかや今に御足に土つきてありとそ
といへり八王子社あり中頃比叡山の八王子断絶におよびし時此所より
勧請せりそれより比叡山繁栄せしといへり金剛童子堂辨財天乃
やしろ鎮守三十八所社あり

石寺 寛文記曰金剛山本堂より廿八町紀州の方に至る
坂中にあり此寺も金剛山七坊の内なり 本尊は石仏の薬師如来
これは役行者百済国より負来り給ふと云伝ふこのゆへに石寺と号す
境内は方十町余あるよし行者堂 葛城明神 金剛童子の堂 辨財天社
鎮守三十八所社あり

南遊紀行云篠峯と葛城山との間に水越山頭とて大和河内往来の
道あり是楠正成吉野籠城の時往来の道なりしといへり金剛山より西の
方へ下り山の水分の社に至る是本道なり其坂は十町余河内大和より

此所へ行く坂に路長し又坤の方へ二十七町下りて千早村にいたる是をこえて
ゆけば又谷より廿余町ほどのぼりて金剛山と千早山との間に楠正成
の石塔あり傍に大なり石燈臺二基あり石の瑞垣あり石川郡換守度
建立せり即南に向へり正成の墓摂州湊川にあるは軀墳なりこれに
あるは首塚なりと云是は尊氏より正成の首を故郷へ送られしゆへ
埋しなるべし 千早の城跡は河内国にして
大和国にあらされとも記せり

大和巡覧記曰或説に葛城山は日本四番の高山なりと云此山に登れは大和
河内摂津西海眼下に遮る

高天寺 高天村にあり正堂一宇僧舎六院
界内に鶯宿梅蜘蛛窟あり 寛文記曰高天寺は金剛山の麓
なりしてむかしは坊あまたありといへし今は伽藍巍々としりしか今の代よりも頽廃
して僅に三間四面の堂宇に十一面観世音弘法大師作釈迦の霊像を安置す其側に遍
照院といへる茅屋の庭前に孝謙天皇の御宇に鶯やどりて和歌を
詠しける梅の本今にあり

称名院殿大和紀行曰
高天寺の朝陽
毎朝来の梅乃
樹ちりれは風に
ねとしくなり
ようやう一丈
はかりの株
枯朽しける
わかれかた
小枝のわつく

朽てふ
梅もとの
まの
なかめに
八重かの
贄よ
のことを
鶯

鶯や
古調うそぶく
高天寺
南洞

古今秘抄曰孝謙天皇の御宇大和國高天寺に稚子あり彼稚子ある童
ありし或時空しくなる師の僧歎くの悲涙しきりとなし
月日を送りく愁とけをれるりかくて次の年鶯来りて梅の枝よ
り鳴其声をきけ初陽毎朝来不相還本栖と聞るれは文字に写
しみれは本の歌へ初陽の朝毎に来れともあはてそ還る本乃栖
古今了誉抄は近江國
ある山寺とあり

南遊紀行曰此かつらき山の東北麓より廿町ほとのほる坂を登りて
高間に至る高間は名ある所なり是よりさかりにて郷内は絶て村々多し
高間より此かつらきの嶺まて二十町あまり此所に桜多し鶯の名所也
大なる社ありまた寺あり俗にいふ鶯の初陽毎朝来と鳴り
し梅ありし所也是より坂路甚けはしきなる崖ありてわすかなる所
おほし竹輿ならてはゆきかたし又此嶺より大和の國中よく見ゆ

蜘蛛窟 俗伝にいふむかし此山に土蜘蛛ありて御門御悩ありし此人勅使を
えらひてこれを滅し此の巌に鎮め給ひしとなりけり件乃
くもをおさへし岩のあり今も余所よりハちかくにてもある
土蜘蛛の事は日本紀に出其巻首に見へたり

高天彦神社 高天村にあり今彦淨権現と称す北窪極樂寺村の氏神とす 神名帳 續日本紀 續日本後紀 三代實録出

松原井 北窪村にあり　極樂寺 極楽村にあり

船丘 船路村にあり船の形に似たりよりて名とす

朝妻山 朝妻村の上にあり金剛山より其坂路を避るの小坂といふ 名図あり 日本紀出 朝嬬行宮天武帝こゝに幸し給ふ

葛木池 朝妻村にあり　故葛木寺 又妙安寺ともいふ村其名といふ 聖徳太子の御建立なり

伏見祠 伏見村にあり今八幡宮と称す

伏見山菩提寺 小野荘六村の氏神とす 俗ニ菅原寺といふ行基菩薩の開基也本堂 鐘楼二王門 僧舎六院あり

壺井 佐味村にあり 泉甚にして美し　風森 東佐味村にあり　櫻井 櫻井村にあり

細井 神通寺村にあり其ゐかれ涓々として田圃に灌く　中位寺 福西村にあり 御巡礼記に出

高鴨阿治須岐神社 神通寺村にあり佐味荘六村の氏神とす神名帳にならび三代實録に出神宮寺あり一名金剛寺といふ大般若経あり跋曰施入大和國葛上郡高鴨大明神云云

御歳神社 持田村の東にあり神名帳出 西持田小殿下茶屋村の氏神とす

多田神社 多田村にあり神名帳出 今荘神と称す

長柄神社 長柄村にあり 神名帳出

葛木水分神社 関屋村にあり神名帳ならび三代實録出

高丘廟 森脇村にあり日本紀曰 蘇我蝦夷祖廟を建

茅原寺
本堂
行者堂

橿原宮 柏原村にあり日本紀曰神武天皇畝傍山西南橿原に都を 大和巡覧記曰畝傍山ハ今井八木の南にあたれり又町西にあり山の巽にうねび村柏原村あり神武帝の橿原の都の地このあたりなり一説に山の東大久保と云所ハ橿原の都のあとなりといへり日本紀に神武天皇長髄彦をうちて天下を定め給ひ畝傍山の東南橿原の地國のまなかなる故都と作てありといへり 下略

腋上嗛間岳 本間村の南にあり 一名望國山 神武天皇卅一年四月帝嗛間岳にのぼり給ひて國の状をみそなはし内木綿の真迮國といへども蜻蛉の臀呫のごとしと宣ひしより秋津國の名あり臀ハ尻也呫ハ掌也西ハ額東ハ腹南北ハ両わきなり 釋日本紀

茅原山金剛寿院吉祥草寺 茅原村にあり 一名茅原寺 人皇卅五代舒明天皇乃創建にして役小角の開基也本堂にハ大尊を安置し伽藍神乃社にハ熊野権現を勧請し行者堂にハ小角卅二才の御時みづから肖像を彫刻して安置し給ふ香精水笈懸杉これらも役行者の遺跡なり

拝む此ハ行者誕生の所なるべく舒明天皇六年の出誕より今に至るまで一千百五十有余年の浄刹なり

孝安天皇陵 玉手村にあり 玉手丘上陵 延喜式に見へたり 字ハ天王山 陵考曰高九間 根廻百尺十間 垣二十尺間

白鳥陵 冨田村にあり 白鳥ノ陵也 日本武尊東夷を征伐し帰陣の時伊勢國能褒野にして崩じ給ふ御歳三十まで昂能褒野の陵に葬まつりし時白鳥と化し大和國をさして飛び給ひしかば群臣棺をひらき見たてまつれば只明衣のみあり白鳥ハ大和國琴弾原にとゞまり給ひしかばそこに陵をたてられ又白鳥飛て河内國舊市邑にとゞまり給ひしかば陵をたてられまた築く白鳥の三陵といへり終に天に昇り給ひしかば衣冠を葬りしといふ 日本紀

弾琴原 冨田に谷三ケ村の間々にあり

池心宮 池内御所二ケ村のあひだにあり日本紀曰孝昭天皇元年に遷都ありこれを池心宮といふ

つゞら川 源ハ金剛山より出るなり流て忍海郡に入持田寺田御所村を経て

巨勢山口神社 古瀬村にあり社名北方ひ 三代実録出 大倉比売神社 古瀬谷合村にあり 社名帳出

新六帖
霞こめて春の
末野に鳴雉子(きゞす)
いつかありかを
人にしらすらむ
光俊

巨勢野 古瀬村にあり巨勢山は里の上方にあり

万葉 巨勢山のつらつら椿つらつらにみつゝおもへは許勢の春野を 坂門人足

新続古今 君もさへ氷もとけて川上のこせの春野は今かつむらん 權中納言為重

新勅撰 玉椿みとりの色もかはらねはこせの春野は名のみなりけり 刑部範兼

千五百番 狩る人のくらせの春野ありしへいはかはらてにかへく 季能

今木雙墓 古瀬の泥村にあり日本紀曰中臣鎌子連入鹿か滅しく 是を雙墓に葬埋せらるゝ事を許せしとそ

大穴持神社 朝町村にあり今之臨川社と称し名義轉あれは 神名帳に出

巨勢川 御所村の南に至くつらく川に入 巨勢の原の巨勢山頒関至長柄森服至成給く 故實といふ 神名帳に出

鴨都波八重事代主命神社 御所村にあり迎藤五ヶ村の氏神之 神名帳文德実録三代実録出

來迎寺 竹田村にあり 飯岡山と號く

戒那山 倶尸羅村にあり此山中に瀑布あり丈十丈瀧の上に寺あり安置せしむ 傍ら戒那千坊の址といふ

鴨山口神社 倶尸羅村高鴨山にあり松一株あり樹下に小祠あり 土人云樹頭にはく聖燈あらはる

小明原 右同村にあり 千塚 右同村にあり 重丘 楢原村にあり緑樹陰森し 林中に小祠あり

葛木大重神社 楢原村にあり 神名帳出

室山 室村の上方にあり

吾妻祠 室村の南鉢伏山の東にあり

室秋津嶋宮 今室村その跡ありといふ人皇六代孝安天皇二年十月都を室の地に遷まし秋津嶋宮と名つけ給ふ 日本紀

孝照天皇陵 室村にあり延喜諸陵式に出る陵考曰宮山は將軍山 根廻て百二十六間高サ九間垣百廿二間八幡祠あり

磐余若櫻宮 池内村の領内廿寅に當て西京といふ所あり 應神天皇こゝに皇居ありしといふ

阿多大野 字智郡阿多村にあり

金葉 なへ葛かへしの大野の白露を吹みたる秋の初風 太宰大貳長実

続後撰 白露のおきての大野の萩か原かすみに吹わけ見るはむしの音 後鳥羽院

新後撰 形見とそおもひのこの大野の萩の露うつろふ色はいはで思はも 定家

続後拾遺 ちりつものこるこの大野のましはらちる秋風そふく 後九条内大臣

夫木 秋風にそよけはみつ白露はおもひの大野にうつろふかな 家宗

阿陀比賣神社 阿陀郷原村にあり

阿陀墓 阿陀村大家山にあり延喜式曰贈太政大臣藤原良継の墓之

龍宮窟 藤村にあり窟中に靈泉あり 影もも涸ず

一字拈
女郎花うしろむくも
なんゆかしか
あさ見太郎に
たゝくあとおとこへし
依理太夫朋季

ひよろ〳〵と
尚露
けしや
女郎花
はせを

榮山寺　小島村にあり。役優婆塞草創の地にして元正帝の御願養老三年藤原武智麿の建立にして伽藍巍々たりしが年経て今僅に遺れる金堂の本尊薬師佛日光月光十二神将千百余年におよんで今なほ存せり。乃ち是をもて金堂に儀然たり又八角堂は武智麿の長男横佩右大臣豊成卿の造営にて造もくべは其僧は求聞持の閼伽井は弘法大師寄附の修練の舊跡と云ふ前なる川の水流うるはしく所為後十二町の間四時常に沿ひてはなはだ静なり世の人名をて吉野川といふ　即吉野川の川上なり　常に船筏の下るを観ては幽閑にして修禅に便あり故に高野大師の仏ぞ来たりて泰澄等の此ん徳こゝに来遊の事当寺の旧記にあるべし

大和志曰當寺ハ藤原氏南家祖太政大臣養老三年建立之正堂　阿弥陀堂　八角堂　多寶塔　伽藍神祠　鐘樓　七層石浮圖　僧院　六字古鐘あり　銘次下に詳之　又石燈爐あり　朔日　弘安七年造と云　又養老　天平　延喜　永延　元中　應永等の綸旨官符數十章庫藏せり

古鐘　山城國深草道澄寺の鐘にて當寺に来りし時代詳ならず當寺の旧記にも所見なし俗説ありといへども信ずるに足らず序銘共に小野道風の筆なり筆の妙を賞する事好むもの義嘆す近頃摸寫の本世に行はる

道澄寺鐘銘并序

小野道風書。見鐘銘集及深草志共有誤字傳寫ノ誤リ不少今所現在摸鐘銘以訂之

道澄寺者。従三位守大納言兼右近衛大将行皇太子傅藤原朝臣。参議左大辨従四位上兼行勘解由長官播磨権守橘朝臣。為報四恩濟六趣。合誠勠力所建立也。堂宇比甍南北輪奐。尊像接座前後跏趺。兩相公。宿殖香火之縁。生為瓜葛之戚。非唯現世結契闊之情。然欲淨刹共安養之樂。故各取其名首字以為此寺額題。所以貽本縁於来代。期同志於他生也。藤亞相。爰命鳧匠。乃鑄鴻鐘。且将令長夜昏迷聞妙聲而知曉。苦海沈溺驚梵叫而通津。延喜七年十一月三日銘之。其詞云

倕師施冶　菩提催縁　虚受必應　響高自傳
從夕至曉　出定入禅　傍唱衆聖　遥驚大仙
法喜增感　耶夢驚眠　通阿鼻獄　達有頂天
刧數億萬　世界三千　一音利益　無限無邊

道澄寺は宗旆伏見街道稲荷前より二町南の西側に道澄寺あり今浄土律の僧住持せり是其遺跡なり舊址は又此より三町東に礎石ありといへり山城名勝志山州名跡志に見え舊址は詳ならず

栄山寺のまへなる
まへ川といふハ
宇智川にして
其みなもとハ
高間山よりなか
れ小和須川ハ
縁くこ在ハ遺り
宇野ハ處く
吉野川に入

後阿陁墓 小嶋村寺山寺の北にあり 贈太政大臣正一位武智麿の墓也 延喜諸陵 續日本紀に見へたり

藤原長岡宅址 同じ小嶋村にあり内麻呂第六子大同年中のころしめ左衛門大尉と 後し最武藝に長じ 兼和十三年従四位上に叙し 宇智郡に隠居し 嘉祥二月卒去 年六十に歳

小島城 大和志曰天文年中 別所友興ここに居る

宇野親治宅址 宇野村にあり 保元物語に曰大和國宇野七郎親治が新院の味方にまゐりしといへり

龍池神祠 二在村にあり宇野河内の氏神也

庶人墓 二在村の上方にあり 土人曰他戸王墓

月見寺 二在村にあり 王墓 須川村にあり由緒さだかならず荒墳也

樒井 近内村にあり

鳳凰寺 小和村にあり

高天岸野神社 北宇智村にあり岸野村といふ所に安置せり

一尾背神社 北宇智村にあり今は山の分神と称す 延喜式神名帳出

観音寺 岡村にあり

荒木神社 今井村荒木坂の北の東にあり今は天神と称す 延喜式神名帳出

宮前霹靂神社 今は久留野村にあり 雷神と称す

宇智神社 今井の安生寺村宇智川の東南にあり 國生明神と称す境内に安生寺あり

矢田畠笠辻 大條村より八町ばかり今井村にあり むかし楠井武者所家成といふ人 その矢田寺の地蔵尊を信仰なしけるが ある時矢田寺より備でん 楠井のふもとにて地蔵尊来臨ましまし 一人とまり給へとそ御笠をとらせ給ひしより笠の辻乃名ありしとぞいへり

御霊神祠 霊安寺村にあり五條村と共に氏神とす 井上皇后他戸親王の御憤りつよく世乃人なやみけるにより勅使を立られ 霊をしづめ給ひしより御霊明神と崇られ

本社 中央御霊井上皇后 北早良親王 南他戸親王三座 若宮一座 本地堂 准胝観音 聖観音 千手観音 如意輪観音 弘法大師の御作也

霊安寺 御霊の社の宮寺なり 正長元年の秋兵火に罹りて焼亡ぬ それよりかく名づけられしとそ 再興称光院の御宇時の住持にありしとかや 神社佛堂本地仏の像も 北畠准三后乃御霊の祈願せしめられし秘佛なれど住侶も知る人なし 此より本地観音の像は頭ばかり残り 安生寺といへるにあり 霊安寺とかいへる 新に造営して安置し

良峯寺 良峯村にあり

丹生川 其源吉野郡加名生谷より發し丹生村を経て 霊安寺村に至て吉野川に入

丹生川神社 丹生村にあり今は御霊とも称す 生子村と共に氏神とす

吉祥院 生子村にあり 正堂一宇 佛舎三宇

宇智陵 御山村にあり今御霊塚といへり 延喜式曰皇后井上内親王 大和國宇智郡にあり

火雷神社 御山村にあり今雷神と称す 續日本紀に見えたり

二見城 大條村の東吉野川岸にあり 元亀年中松倉重政居城と

落瀧川 舊名見瀧川又は源を升福山より上村又は瀧村を経て 新町にて吉野川に入

新勅撰

在中将にまかりてやまとの方にある人のもとにまかるに 讀人しらず

類聚

いそげども ゆかれぬものは 落瀧川 みなぎりておつる 水は河内

大名の
寐ぶりも
猿くるか
宿かな
許六
八條里ハ
守智郡の驛みしく
四方の旅客ここにゆきて
遠近の産物もここに交易
して朝市夕市ともに家
多く郷の繁ひいとん方か
白虎通日商とハその者を通
商ひ四方の産物を通じされハ
聚しくく

二見神社　二見村にあり今両部と　続神祠　須恵村にあり今八幡と称す
称す神名帳出　五條村と氏神なり共に二代実録出

櫻井寺　須恵村にあり続の神宮ちかくにあり天暦年中武者所康成の建立也

櫻井　櫻井寺の傍にあり天文廿二年鋳造の鐘の銘に見えたり　中村坐神祠　下中村にあり今御霊と称す
横九尺竪五尺　牧野荘八ヶ村の氏神なり

安井寺　下村にあり当寺の仕越に上村城　上村にあり
阿字曼陀羅あり　牧野入道居城なり

神福山　大澤村にあり金剛山より続く　大澤川　源は大澤村より出て荒野の
山勢高峻にして松檜蒼々たり　里に至て吉野川に入

高天山佐太雄神社　神福山の嶺にあり俗に天狗岩といふ
神名帳出

大澤寺　大澤村にあり神福山と号す薬師堂一宇境内に琵琶池
大なる石あり真言修験道也

楊貴氏墓　大澤村にあり享保十二年村民田を耕すに瓦のやうなる墓誌を掘出せり
中より顕る一寸六分長七寸横一尺の土瓦三十枚なれども
損して全きは十枚なり今散乱して残るもの三枚　蓮華寺にあり什物
とす文字は彫たる字面に朱を入たり其文曰
従五位上守右衛士督兼行中宮亮下道朝臣真備葬亡妣楊貴氏之墓　天平
十一年八月十三日記歳次己卯云云　全文金石模写図に出す

蓮華寺　大澤村にあり

真土山　上野村の西にあり催馬楽註秘抄曰大和紀伊の国境なり
澄月云枕日信土山紀伊国云云

拾遺
いで人は言のみぞよき真土山の郭公にもあらし人にまさらでやむかな　読人不知

新古今
紀の関守いかで大和の真土山ちかき月にいざよひの月　太上天皇
能宣朝臣大和の真土山ちかくすむける女のもとに遣はしけり
ならびなき君も真土山こえてみまくほしさに女のよみける

続古今
たのめこし人は真土の山風にさ夜ふけしかば月もかくれぬ　大僧都
あくがれし真土の山の郭公心ありてやまつとなくらん　頼家

人を待つ真土の山の山風にむかしの心は真土の山門の水　藤原為家

新続古今
我せこが待ち真土の山の暮るもまさらに立ちかへる道やありし　鎌倉右大臣
咲きまつらむ花は待ち真土の山のかげに人をのみ待つ程の春の夕暮　前摂政左大臣

戸立山　南荘紀州日戸は石山は堤の如くそびえて山うり此にそれ
戸といへば隠もとあるように侍るを名所と名に著す大和国中将部

とあり里人は紀州の
内なりといへり

角田川　奇抄日大和国信土山のかたはらに
ありとそ名所ありしと云云

万葉
白妙に匂ふ信土の山川に我馬難家恋しも

落松神社　在所不詳或日黒馬村にあり今御霊と称す
近隣十三ヶ村の氏神なり

大飼寺　大飼村にあり

新古今
誰をかも待乳の山の
をみなへし
秋と契れる人そ
あるらし
小野小町

内大野　大野村にあり　いにしへ御狩ありしはこゝに大和國と云ふ
万葉　澄月按に宇智郡にある名
たまきはる内の大野に馬なへてあさふますらんその草ふか野
夫木
霜さやく内の大野ゝ枯尾花にあさぬすせり駒か川むこ　為家
安日寺　藝野村にあり　吉野川波　大綱村にあり
畝嶺山　大深村にあり　續日本紀出
高市　倭名類聚鈔曰國府高市郡にあり日本紀神代巻曰天高市　社名秘書に曰天之高市天宮是なり鴨社之日雅郡に建る人新なり
中臣祓に所謂高日國一日高見國　みな此ところ指なり
國分寺　南八木村にあり　延喜式出
倭漢記　花乃七世代河上人和訓米
蘇武川　曽武橋　八木村にあり
鴨事代主神社　高殿村にあり今大宮と称す　鴨公森天武天皇元年高市郡大領高市縣主許梅に神託ありしなり
三代實録に出
秀泉井　高殿村にあり

鷺栖神社　四分村にあり今鷺栖八幡と称す　延喜式出　玉林抄曰藤原宮ハ鷺栖坂の北也按に鷺栖の地名も今四分村にあり
桒原井　四分村にあり
廢藥師寺　木殿村にあり礎石存す天武天皇の建立後平城の右京に移す
田中宮　田中村にあり　舒明天皇皇居しめたまひし所なり
馬立伊勢部田中神祠　田中村にあり今八幡と称す　二ケ村の氏神なり　三代實録出
石川廢精舎　石川村に本明寺乃ひ石塔あり是その古址なり　敏達天皇二十一代敏達天皇十三年九月百済國より弥勒の石佛一躯を貢く蘇我馬子これをうけて播磨國の惠便法師を法の師とし善信尼禅藏尼惠禅尼の三人は佛法をうやまひつかへしむ馬子の宿祢これを試んとて舎利を鐵鎚にてうつにくだけず又水に入るに浮ぶ是より馬子宿祢池邊氷田司馬達等仏法を尊み馬子が石川の宅に佛殿をつくりて仏法のはじまりとや
孝元天皇陵　石川村にあり字中山塚といふ陵の前に劔池といへり故に劔池島上陵といふ　日本紀　陵考曰陵高一丈根廻三十二間嶋廻三百廾間
田身池　和田村にあり　多能武池ともいふ
夫木
下ひとつゝみやつくさんぐんその夏たなむひの池にあふる菖蒲を　隆博
大野丘塔　和田村にあり礎石存す蘇我馬子が大塔を建し大野丘の北にして石川精舎のこと宇屋大連焼拂へと云ふなり

廢大官大寺 小山村に礎石あり俗に講堂といふ其外これを如く所々にあり塔の礎よりも大なる
どの石よりのつ子の　礎石の径六尺八寸又は以前よりの　豊浦池 豊浦村にあり

甘樫坐神社 豊浦村にあり今推古天皇と称す 神名帳三代実録出

味橿丘 豊浦村にあり皇極天皇三年蘇我入鹿こゝに家を起す

允恭天皇四年より諸氏の姓氏真偽を糺したまはんがために甘橿丘に釜をすへ神に誓ひ熱湯をもつてちかはせらるゝの勅宣ありしかば本姓をうしなふ氏姓の人々湯浴斎戒して味橿丘にいたりその手繩をかけ釜にむかふて熱湯のなかに濯ぐ真なるものはつゝがなくことなくいたはりあるものなし偽あるものは熱湯のために手をいため深く恐れて立さりそれより退きけるにより氏姓をいつはるものなし これよりしてこのかた氏姓定まりぬ 日本紀

後世の帝王代々本系をなし図書寮に納めらるゝも此ちなみによる

本朝湯起請の初めなるべし 續日本紀弘仁私記大書等の證書に出たり

廣嚴寺 豊浦村にあり又向原寺に作る又の名豊浦寺といふ傍に井あり櫻井といふ又の名榎葉井といふ人皇三十代欽明天皇十三年十月百済國の聖明王金銅の釋迦像一軀幡蓋經論若干の巻を帝に奉りけり其時群臣奏して曰我国天地社稷の百八十神をまつるこそ他國の神を崇むべからずと奏しければ故に蘇我稲目に仏を給ふ稲目小墾田の家に安置し向原の家を寺とす物部守屋大連寺を焼き仏を難波の堀江に流しけれど後に向原寺を本朝寺院のはじめとす三代格に曰元興寺は佛法元興の場聖教最初の地なりといへり

続古今
かつらきやとよらの寺の秋の月西に成までかげぞすみける　源具氏

王家
ます鏡入ぬる名残の花も見るまであかれぬものは入相の空　入道前太政大臣

夫木
かつらきや豊浦の寺の西なる榎葉井に白玉しつく

難波堀江 玉林抄に曰豊浦寺の東に仏門の西ひがしに入江あり堀江といふ守屋大連堂塔を焼仏像を流しける所なり今は只小池のごとくなれども古は海につゞきて広くありしならんといふ又難波江ともいへり又法隆寺の縁起に摂津國難波浦ともいひ又大和國難波江ともいふ何れか定めがたし

蘇我入鹿第 豊浦寺の辺にあり 榎葉井の東にあり 甘橿丘の内にもありといへり

橘寺

宮舊班鳩古道長
當年廐戸說經場
天花作雨繽紛色
偏帶故墟盧橘香

大江資衡

寺寂し
常世橘に
むかしの香

湘夕

小墾田宮 豊浦村にあり推古天皇十一年皇居ならびに遷り皇極天皇二年十二月またこゝに遷移し此辺に細川のながれにかゝりたる板橋ありこれを
すなはち万葉集に小墾田橋と詠じ千載集以下撰集載る所板田橋といふは
此小墾田橋の事なりと旧説にいへり

千載
朽果てあやうく見へしをとろへて田の橋も今渡るなり 法橋泰覚

玉葉
とたえしても板田橋のとだえしなふみわたしても渡る君かな 如信法師 一名親鸞聖人

同
朽ぬるを板田橋のそのかみ作りしひとを思ひしはるかな 二条院讃岐

続後拾遺
いにしへの板田橋はこぬ人のあとにまよひし人を我せこ 人麿

同
五月雨に板田の橋もあやうくぞかゝりわたらん道にまよふし 加茂基久

軽池 大軽留村にあり一に軽に作る 日本紀に出

玉葉
軽の池の入江をめぐる鴨すらも玉藻の上にひとりねなくに 紀皇女

新千載
名にしおふ軽の市人かずならぬとしの年もみなかれて 為友

廃軽寺 軽村の属村東明寺邑にあり今薬師堂として本尊薬師仏像あり
軽の大臣遣唐使の時唐の則天皇后叡感の仏像なりしを軽大臣にたまはる
宮女にたとへしく後に姿を見せたまひしとぞ軽大臣乃面を喪ひ
軽大臣遣唐使たりし時天皇后の命によりくかの大臣の面をかくし
そのまゝ額に燈台をのせて火をともしてこれを世の人に世の人燈台鬼と
そいひけるこれは人皇卅五代舒明天皇の御宇のことぞありしとなり後

卅六代皇極帝の時かの大臣の息宰相遣唐使となりし時燈台鬼となりて
まみえたる父としらずさりけり父は我子なりとしりて血のなみだをなが
一詩を吟じて詩句を書きしるせり父とはしらざりけり又かの仏
燃ましくなしきかなしきかぎり縁起にみえたり

我元日本華京客 汝是下家同姓人 為子為爺前世契
隔山隔海恋情辛 経年流涕蓬蒿宿 遂日馳思蘭菊親
形破他郷作燈鬼 争帰旧里寄此身

燈の鬼となりし身をなしてもなかへものかたりにけり

或曰此る後人の附会して忠誠なりとしるも既に下学集 及び神社啓蒙
にもあれなどに軽大臣なりしの時の人はいふ国史諸実録に所見なし

曲峡宮 軽の衙坤大町といふ所小田地の字に存せりさきの所なりとの庁言と
いへり懿徳天皇都を軽の地に遷して日本紀に見えたり

境原宮 軽の西に天神の祠ありも所なりとそのいひ伝へたりしとそなん
孝元天皇四年都を軽の地に遷し日本紀に見えたり

豊明宮 応神天皇元年都を軽の地に遷し是豊明宮といふ日本紀に
見えたり 旧址不詳

新撰六帖
軽鳥の明宮のむかしよりたえてしもなき人の池

檜隈大内陵 五条野村にあり天武帝持統帝合葬し奉る陵なり字を
の墓又円山といふ中に石棺二ッあり陵考曰高四間根廻
九十五間
廻八十八歩

廃川原寺 川原村にあり堂一宇古仏の二尺又十二尺の像あり傍に礎石あり
一名弘福寺といふ

菩提寺縁起曰
極楽の西方より
金色の蝶とび来
りて講堂の柱に
とまりしがやゝありて
しばしして飛さりぬ
其跡を見ればむしくひにて
一首の和歌を喰
付けり

新古今
菩提寺の講堂の
柱にむしのくひ
たる歌

しるべある時にだにゆけ
極楽の道にまどへる
世中の人

佛頭山上宮院菩提寺 一名橋寺とも號す 橋村にあり安倍島山ともいふ 正堂合佛堂僧舎一區あり

人皇三十四代推古天皇十四年七月聖德太子勝鬘經を講せさせ給ふに塵尾をとり師子座にのぼりたまひしとき出家のごとく見え給ひし諸の名僧大德其妙義をきゝてなみだを流さぬ人はなかりしとかや天より蓮花ふりて地にみちたる其の花のさし渡り二三尺ありしとぞ 平氏傳太子傳 本尊聖德太子十六歳の遺像を法空上人の作りける 此上人は久我殿息持明院殿の時代の人とかや 太子二歳の尊像は日域の最初之 王林抄

佛頭山といふは勝鬘經講令の時清涼殿の前の山頭に千佛の御くし出現ありしより山號とせり 王林抄 此山今にありて清涼山ともよべり又千四丈よぶ所へ又上宮院とは上宮太子の御建立なり院号とせり橋寺とは橋の邪の皇居の地なれば也の名によぶなるべし 寺前石碑あり 碑銘曰弘法大師一丈餘の碑を立給ふ云云

其銘曰 佛頭山 上宮太子勝鬘講讃之砌 千佛湧出蓮華庭前之下

當山縁起曰 太子に勅して清涼殿にて勝鬘經を講説ありしに虚空に音樂きこえ天異香四方に薫じぬる山に千佛の面貌光明赫奕として現じたまふ天皇奇異のおもひをなし叡感かぎりなく則此所に東西八町南北六町金堂講堂合堂五重塔經藏鐘樓中門惣門六十六坊の僧坊覚をみかれ我朝第一の伽藍を建営したまへ太子曰日本の霊鷲山は是なり此寺は一代の教法をとき又極楽に往生せん御縁の二首あり

佛出る花の道場の有ける所に太子の國とたのまくらん

有難き法のむしろの地に落てあらはしたまふ橋乃ちら

畝割塚 太子七歳の御時百濟國より諸職人を御招ありて寺院を建營し給ひ田畑をわりし其時分の農具を石に至るまで本朝になかりしゆへ田畑三百六十歩を割せられ其十分一として二十六坪を石にて畝割の金堂の基本給ふにありしを以て畝割塚と号す 畝割の勝鬘經講讃の砌ぞくそりなりし花を此所に埋め給ひゆへに蓮花塚ともいふ又同年に二六毎日に示し給ふ八萬四千六毎日のきしむなり

春井 此ちかひより二つの井あり是太子御誕生の名といふ 東に春井南に家井 此は同の井は池ある西に赤染の井あり湯わかくなりあり 其の外に二つの井は加へられ 春井は今にあり

古鐘 勒曰建治四年泉州大鳥郡 深井村若徳寺藏 石燈爐 附代不詳古代の相形うつくし 絡品なり

拾芥抄曰菩提寺又橘寺と號す志度の道場上西海人これを建立すとしるし人
八雲御抄曰勅撰の名所なりしに橘寺は内國と云ふありしに斑鳩宮の古跡なり
みはしへぞかくてよりけん
大和國うたゝへし
年根
斑鳩の宮の古道うちみれは橘寺の花乃下風

聖霊集曰淳和帝の御宇に故中務卿親王の御為に薬師如来日月遍照両士
の御建立ありしに金文の蓮華法曼陀羅書寫の功をとゝのへり天長
四年九月に橘寺に安置しおはしけり

厩坂 所不詳應神天皇十五年八月百済國より使をして馬二匹を貢す軽の坂上の厩に
御預之の飼はしめ給へり
阿直岐といふ人に飼せたまひけり馬をやしなふ所なれば厩坂といふ

厩坂宮 日本紀に見えたり 舒明帝の行宮也 厩坂池 所不詳 日本紀に見えたり 推古紀 厩坂もとりうめらるん

神名備山 飛鳥村にあり 神岳 真神原 浅小竹原 みな此あたりなり

萬葉
かんなびの山はゆふけて吹かへり秋ともしらぬ川楓かな 宗尊親王

澄月法師
飛鳥風むかしをさそふ今朝の夢さめて衣手に露ぞなりつゝ 名法

飛鳥坐神社 飛鳥村にあり神名帳出四座合殿小祠五十餘又酒殿の祠村のうしろにあり大石あり縦一丈五尺横五尺石面に摺七道を彫刻にあらはす
いつもしゆく神酒をさゝくに沐浴をとりし

奥社二座 天照太神宮 豊氣太神宮 末社八十座
本社四座 事代主神 高照光神 建御名方神 下照姫命
中社二座 素盞烏尊 大己貴神

飛鳥井 社前 催馬樂曰 飛鳥井にやどりはすべしやおけかげもよし みもひもさむし みまくさもよし

板蓋宮 飛鳥岡二村の間にあり 齊明帝 皇極帝即位しめ給ひ皇居の跡なり 川原宮 板蓋宮より遷居の跡にて 同村の間にあり 天智帝

飛鳥寺 飛鳥村にあり今は眞言宗にして安居院と号す 舊當寺の 舊跡 飛鳥村の北田畑の中に礎石九十ばかりあり
一名元興寺と號して靈亀二年平城右京にうつされ藍觴は聖徳太子
守屋を退治の時御誓願により十七歳の御時建営したまふ本尊は
釋迦如来丈六の尊像鞍作鳥佛師の作也初め造仏の時高麗國大興王
つたへきゝて黄金三百両を献せられ遂に佛成就しおはんぬ光銘曰 推古天皇十三年歳次
乙巳四月八日戊辰以銅二萬三千貳百斤金七百五十九両
敬造釋迦丈六像銅繡並挾侍等云云 初住は高麗の慧慈百済
の慧聡此両師こゝに於て安居したまふ又後齊明天皇
三年に須弥山の形をこの寺の西に作りて盂蘭盆會あり 日本紀に見えたり是本朝盂蘭盆會の始
とかや 又天武帝六年に一切経を讀誦ありて帝はこの寺の南門に立て三寶を
禮したまひ珍寳を施入しのち持統帝元年に天武帝の御為に僧
袈裟をおのおの別に一領つゝ施したまひけり 日本紀 又仁明帝承和十年をろ

飛(あすか)鳥(の)社(やしろ)

燈油一解正税二百束を施入ありて十二月十五日萬花会十月十八日下燈会を恒例として勅使をたて宣下し給ふ 続日本紀

彼寺はいにしへ貞観四年の官符に書せられし勅に曰 此寺は仏法元興之場聖教最初之地也 故和銅三年帝都遷平城之日諸寺随移件寺独留朝庭更造新寺備其不移 所謂本元興寺是也 三代格 往昔四方の門毎に額あり

ひかしの門は飛鳥寺 にしの門は法興寺 南の門に元興寺 北の門に法満寺 今飛鳥村にありし真言宗の道場とする 京師西本願寺の末流なり 西南の両寺今は安居院に属に

安居井 橘寺より艮にあり甘泉にして これはのむりの病疾を除くとなん

続後拾遺

ふるさとゝなりにしならの都にもあすかの寺のそのかみの跡 式部卿親王

続千載二十首目

むかしの世へうつり今あすかのさとの名のみそのこりてかはらぬ人

飛鳥山口坐神社 飛鳥村上方鳥形山にあり 神名帳之式内社

遠飛鳥宮 古事記曰允恭天皇遠飛鳥宮に坐 今旧址さだかならず

新続古今

いにしへの跡をたつねてあすかの都にもとむれとなし 権大納言公好

飛鳥浄御原宮 飛鳥の東南にあり 天武帝の御宮也 浄御原宮とも 又橘井あり

荒墳 飛鳥にあり 俗に入鹿の塚といふ

飛鳥川 源は畑の山中より出て稲淵を経て細川と合し 岡飛鳥の西を経て今井に至り蘇我川といふ 北の方広瀬郡に入

古今

きのふといひけふとくらしてあすか川流れてはやき月日なりけり 春道列樹

同

世の中はなにかつねなるあすか川きのふの淵ぞけふは瀬になる 読人しらず

後撰

淵は瀬になりかはるてふ飛鳥川渡りみてこそしるべかりけれ 在原元方

拾遺

飛鳥川しからみわたしせかませは流るゝ水ものどけからまし 人丸

後拾遺

淵やさは瀬にはなりけるあすか川浅きを深くなす世なりせば 赤染衛門

新古今

あすか川もみぢ葉流る葛城の山の秋風吹きぞしくらし 人麿

同

飛鳥川瀬々に波よる紅や葛城山の木枯の風 権中納言長方

同

飛鳥のあすかの里をおきていなば君があたりは見えずかもあらん 元明天皇

続古今

あすか川ゆく瀬の波にみそぎしてはやくぞ年のなかばすぎぬる 定家

同

年ふるはいつかあすかの飛鳥川さだめなき世ぞ見しひぬる 大僧正

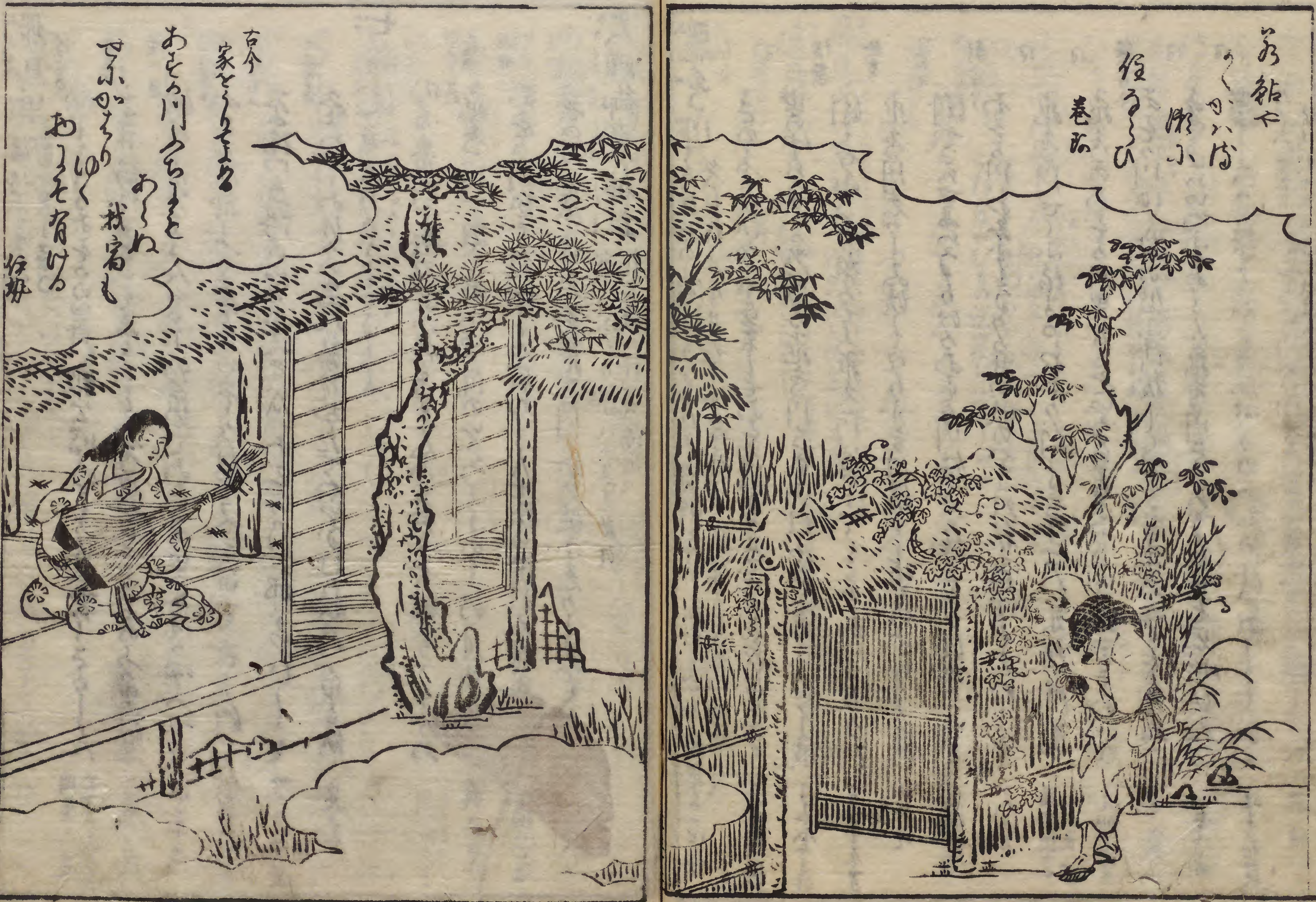
同

世中よいかにかはらんあすか川あすかの浅き瀬ぞしかるも 後京極摂政

同

今日までは早くあすかの川の瀬のよはあすかに淵瀬とぞなる 行順

飛鳥川の和歌凡廿一代集の中に八十五首あり


古今
家をうりてよめる
あすか川ふちにもあらぬ
我宿も
せにかはりゆく
ものにぞ有ける
伊勢

飛鳥里（あすかのさと） 橘川原東山雷土村に属す

続古今
なつふかきあすかの里の郭公啼てぞ帰る声のきこゆる　岡屋入道前摂政太政大臣

玉葉
古井のはたをさしもくしくあれはてゝあすかの古里　土御門院

続千載
ゆくへなく人さへ今はうつろひてあすかの里の跡もなくさき　源兼氏

続後拾遺
あすか風袖吹く夜半の衣手にこの里も衣うつなり　源兼康朝臣

新続古今
苔の枕つゆのはなにみとせつゝあすか乃都もあひすへし　権大僧都尭孝

十五番歌合
冬ごもりあすかの里は旅枕おきてやはすむ秋乃白露　定家

七瀬淀（なゝせのよど） 飛鳥川の下流なり

万葉
あすか川七瀬の淀に住鳥も心あれこそ波たてさらめ

内裏歌合　続後撰
あすか川七瀬の淀に吹風のいたづらにのみ行月日哉　順徳院

風雅
あすか川ひとつ淵とや成ぬらん七瀬の淀は五月雨の頃　権中納言公雄

壬二
春の日も今宵ばかりや飛鳥川七瀬の淀に花しづむらむ　家隆

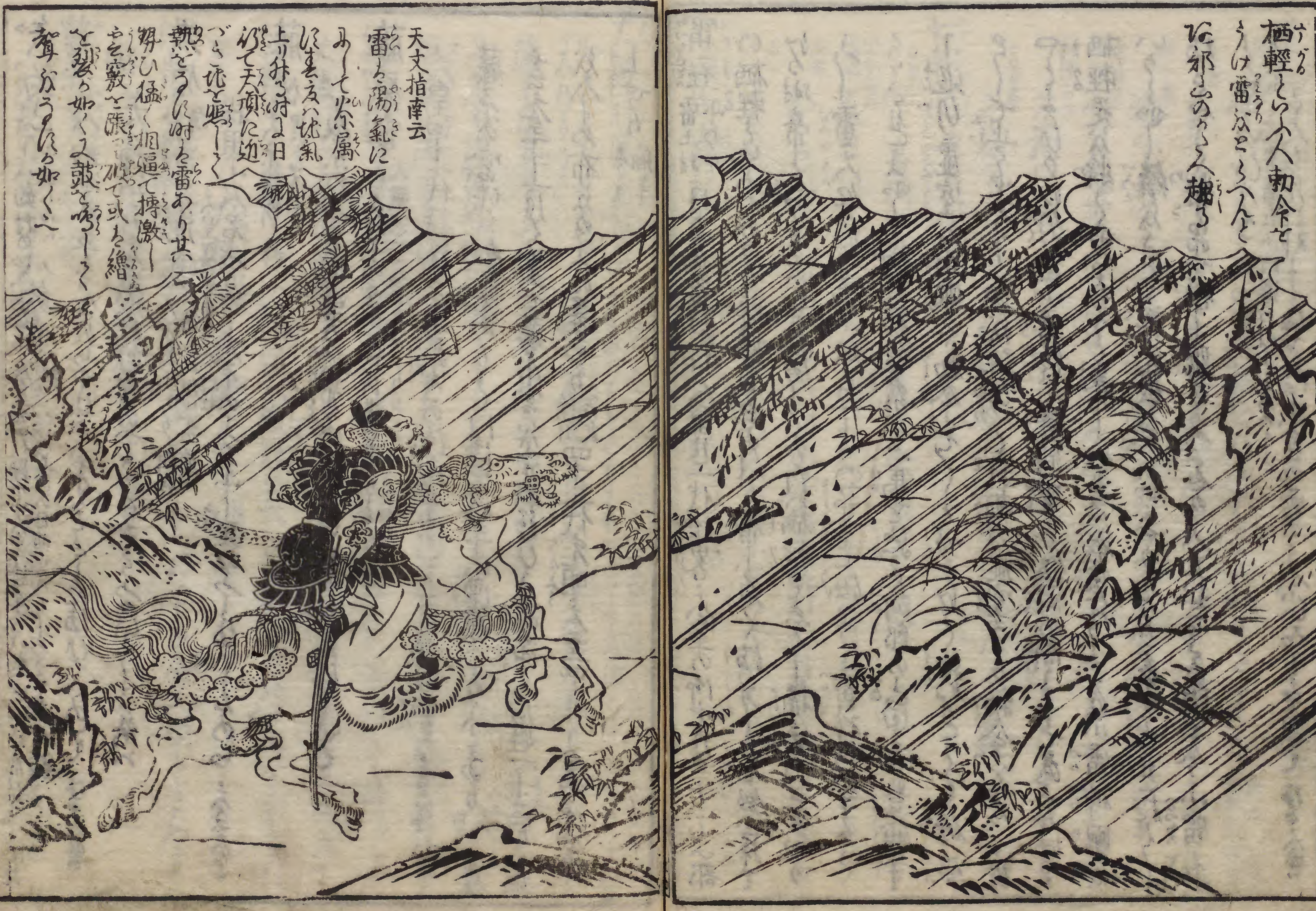
大國御魂神社（おほくにみたまのじんじや） 雷土村にあり 今八王子と称す 神名帳 三代実録出

雷丘（いかづちのをか） 雷土村にあり 日本霊異記曰 人皇廿二代雄略天皇の御宇廿三年に少子部の栖軽といふものあり 腰脯の臣なれど帝に近く侍す 大安殿に宿るおり帝と后とまじはりしたまひけるを栖軽しらずして掻縁しけるおりしも 雷天になりければ帝ひそかに栖軽に詔して汝よく雷神を請じまいらせよとありければ 栖軽勅を承りて馬を馳て阿部の山田より豊浦寺に追り虚空に白眼て勅命ぞくと呼わけて馳ゆくとしも磐碗をさして止ことなく又馳かへり我朝の虚空より勅命を违しなどやとよびかけり 径に雷神は豊浦寺と飯岡の間に落ちけるを 栖軽是を見て神司を召して輿に載て宮に奉りければ 雷神は光を放ちていかめしく綵ひて異光殿舎にみちければ帝恐れ給ひて幣帛を供し落たる所へかへさせ給ふ 其おちたる所を今に雷丘といひける

万葉 天皇雷丘に御遊の時よみ給ふ
おほきみは神にしませは天雲の雷のうへにいほりせるかも　柿本人麿

栖輕といふ人勅令をうけ雷をとらへんと比部山のかたへ趣る

天文指南云
雷ハ陽氣に
して火に属
ゆゑ夏ハ地氣
上り升る時ハ日
照て天頂に近
づき地を照しく
熱する時ハ雷あり其
勢ひ猛く相逼て搏激し
雲靄を張ッ破て或ハ繒
を裂るが如く又鼓を鳴らしく
聲なるが如くこへ



矢釣山　上八釣村の上方にあり

八釣宮　人皇廿四代顕宗天皇遊兎苑八釣宮にて即位給ふ　紀　正統　三月上巳の日曲水の宴をきこしめせし　編年

万葉　矢釣山木立も見えず降りみだる雪はだれなる朝楽しも　柿本人麿

又　矢釣川の名所は此山のふもとをながるゝ故に

大原　八釣村にあり　所伝

藤原　大原村にあり　又大原の里に

万葉　我里に大雪ふれり大原のふりにし里にふらまくはのち　天武天皇

藤原　異名なり

万葉　藤原のふりにし里の秋萩は咲て散にき君待かねて

藤原宮　大原村にあり　旧年御造営ありし　大織冠の大宮是なり

人皇四十一代持統天皇飛鳥の浄御原にいます此の時都を藤原に遷して宮処を敷給ふ　八年に遷都しあそばされり　慶雲元年十一月にはじめて藤原宮の地を定められて宮中に百姓一千五百五十烟に布を給ふ　紀　四十三代元明天皇四年に至り藤原宮より奈良へ遷幸あり　続日本紀

上せり　帝王編年

大織冠藤原鎌足誕生地　土人曰大原のかたはらに大織冠の誕生の地とて産湯の井といふ

即大原の御井の清水是なり　大織冠鎌足公は和州高市郡大原の人なり　書紀

藤原の第にして推古天皇廿二年甲戌八月十五日に生れ給ふ　多武峯家記　一説に常陸国にて出誕したまふともいふ

根命の御末にして天智天皇八年十月藤原の内大臣鎌足公病に臥給ふとき天皇其家に行幸ありて東宮大海人皇子をして大織冠と大臣の位とを授けられ藤原氏の姓をぞ賜りける其翌日薨ず寿五十六歳　一説五十

大織冠は正一位の冠なり　日本紀

藤原寺　法光寺とも号す　旧址不詳　拾芥抄に法光寺は中臣寺也と今大原にあるをいふか

藤井原　大原御井と同所今不詳

万葉　藤井が原の名のみ残りけるを

此の藤井が原の名によせて藤井原も此の辺なるらん　注九条

夫木　此の藤井が原の名も今はいかならん

大織冠社
藤原祖先墳

藤原宮御井 今醍井と云 旧跡といへり

萬葉 八隅知之我大君の高照す日の皇子あらたへの藤井が原に大御門
はじめ給ひて埴安の堤の上にあり立し見し給へは日本の
青香具山は日の経の大御門に春山としみさひ立り畝火の
この瑞山は日の緯の大御門に瑞山と山さひいます耳成の
青菅山は背友の大御門によろしなへ神さひ立り名くはし
吉野の山は影友の大御門ゆ雲居にぞとほくありける
高知や天の御蔭天知や日の御影の水こそは常にあらめ御
井の清水

此歌のこゝろは詞林採葉曰藤原ノ宮に東西南北の大御門あらはれたりその二門は日の経緯によりて方角をあらはせり後の二ツは山の陰陽をもていひしと也又周礼日本紀以東西為日経以南北為日緯山陽曰影面陰曰背面是以百姓安居而天下無事焉

衣通媛家地 在所不詳

衣通媛はいとうるはしき形容衣よりとほりて光れる故に名とす
かくそいへるなり稚渟毛二岐皇子の御女にて允恭天皇の后の忍坂
大中姫の御いもうとにておはしける天皇衣通媛をめしけれども
しかも姉君のこゝろにそむかんとはゞかりて参り給はず御使たびたびに及べとも
かたく後舎人中臣烏賊津使主詔をうけたまはりて衣通媛のもとにいたり
はかりごとに君はかならず召給へども参り給はずは我は罪にあたらんとして
家にかへらずとおもひてひそかにその庭の内に伏て七日をすごせり衣通媛
いなびがたくて参り給ひしかば藤原に殿屋をたてておらせられけり
天皇藤原に行幸ありけるに衣通媛の消息をしのびやかに伺見
させ給ひしに衣通媛ひとり君まちがほにて 日本紀

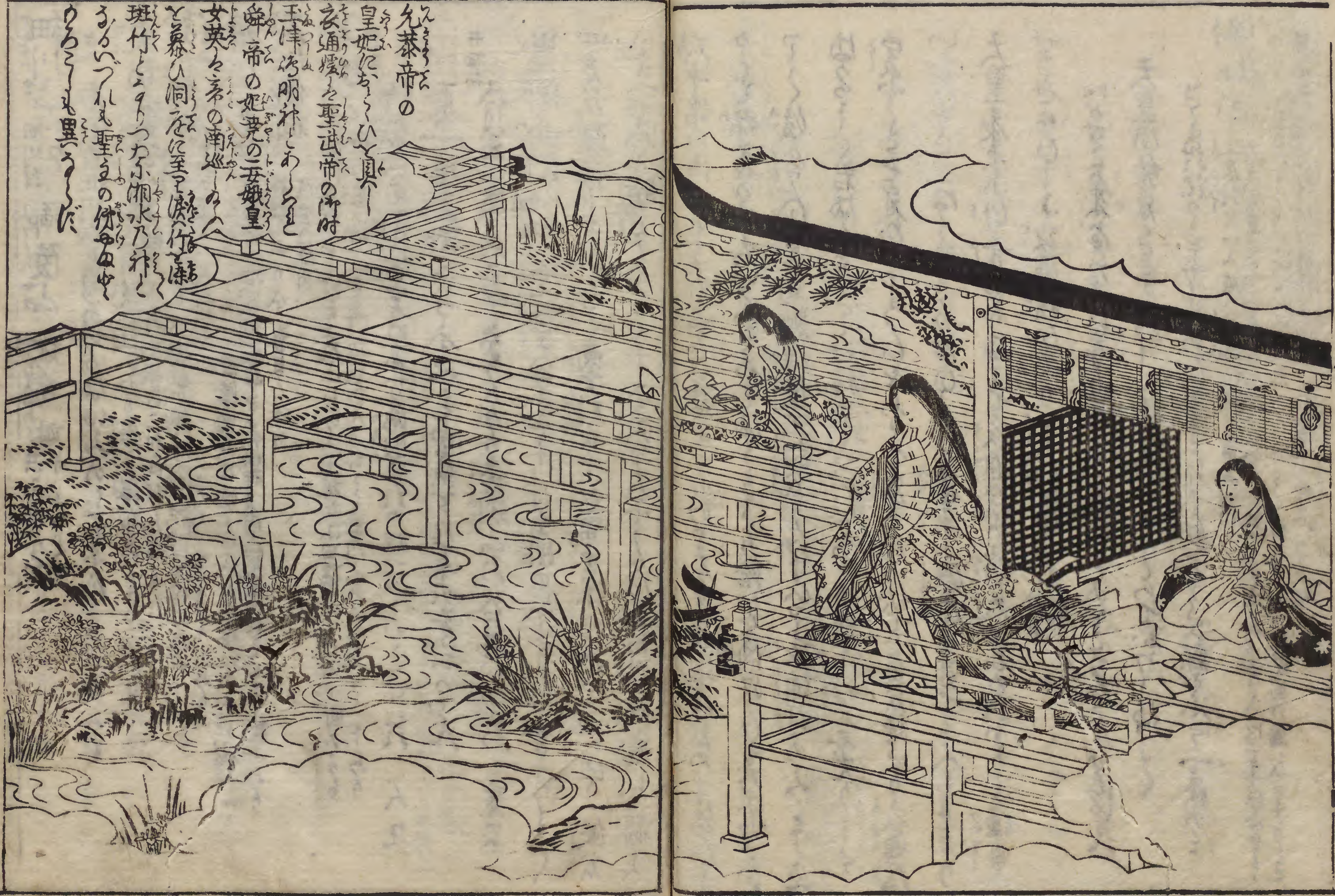
わがせこが来べき宵なりさゝがにの蜘の行ひこよひしるしも

天皇此歌をきこしめしてより御心にかけておぼしたまふ

さゝらがたにしきのひもをときさけてあまたはねずにたゞ一夜のみ

浄御原

上居村にあり或は浄御原に作る旧名細川 天武天皇元年に飛鳥浄御原宮と号しみかどをうつし給ひ二年正月即位ましましけり又遷都あらんとて群臣より信濃国の図をたてまつる然に朱雀元年八月浄御原宮にして崩じ給ふ 日本紀



元恭帝の
皇妃におさ〳〵ひと貞し
衣通姫も聖武帝の御は
玉津嶋明神とあらはし
舜帝の妃尭の二女娥皇
女英も帝の南巡しゆへ
と慕ひ洞庭に至て涙竹に滴る
斑竹となりつひに湘水乃神と
なるいづれも聖主の后妃也
けることも異ならじ

細川山 細川村にあり 御陵山 氷室址 共に細川山のつゞきなり

新古今 衣笠内大臣
南淵の細川山そ時雨るゝはゆみのもみぢ今さかりなりけり

氣都和既神社 上村茂古杜にあり 傍に瀑布あり 高さ二丈八尺 細川上居尾曾の三村氏神なり 共にあり

淺茅原 小曾根村にあり 桃樹繁殖し それの盛りは美観なり 氷室址 小曽根の北にあり

滑谷岡陵 欽明帝 滑谷岡に葬りて其後檜隈坂合陵に遷れしと日本紀にあり 村のかたはらに優婆塞の古墳として人あり 俗にかかる谷といふ

大仁保祠 八谷村にあり 今春日と称す 三代実録出

南淵山 細川山のうしろの上にある山なり 王林杜に白檮ちよりの八十町ばかり 此山の名所八雲抄ほかに出たり 細川山のみかぶといふもあり

万葉 御食向南淵山の巌にはふれるはだれかけづりのこせる 人丸

同 真十鏡南淵山は今日もかも白露おきて紅葉ちるらん

井蛙抄 又月日にそへるむかしのありし南淵山乃谷は川原 定家

男淵 女淵 細川村にあり。皇極天皇元年八月南淵の河上にて跪きて四方を拝し天に仰いで雨を祈り給ふに雷鳴して大雨ふる 雨ふること五日にして天下をうるほし百姓万歳と称へし

日本紀 是より先に天皇 元朝四方拝の基かみやのりなるべし 江家次第

加夜奈留美命神社 栢森村にあり 今葛神と称す 延喜式 三代実録出

金剛寺 坂田村にあり 推古天皇十四年南淵坂田尼寺を建つと日本紀に出 都塚 坂田村にあり 名義不詳

飛鳥川上坐宇須多岐比賣命神社 稲渕村にあり 今宇佐宮と称す これより二つ村の氏神なり 延喜式名帳出

南淵先生墓 稲渕村にあり 今明神塚といふ 先生は諱漢人請安 推古帝十六年勅ありて入唐し周孔の教を学び熟業して舒明帝十二年朝に還る 中臣鎌子連と蘇我入鹿の逆意を顕し これを滅さんと共に謀る

龍福寺 稲渕村にあり 境内に竹野朝臣の墓表あり 文字剥滅す 田麻呂第宅 同所にあり 大宰帥宇治の五子なり

呉津孫神社 栗原村にあり 今下の宮と称す 延喜式名帳出

勾池 島庄村にあり 真弓池 勅撰名所に高市郡なり 勾池とは所なるの 嶋宮 勅撰名所に大和国なり

万葉 嶋宮勾の池の放ち鳥人目にこひて池にかづかず

同 嶋宮のはかの池なる放ち鳥ひとめにこひて池にかづかず

同 嶋の宮上の池なる放ち鳥荒びな行きそ君まさずとも 舎人

同 高光る日の皇子のいましせば嶋の御門はあれざらましを 仝

岡寺
本堂
開山堂
方丈
岡村

東光山龍蓋寺 一名岡寺 欽明天皇の皇居岡本宮の地なればかくいへりとぞ 天智天皇の御願
義淵僧正の開基なり 西國第七番の順礼所なり 義淵僧正はおさなき童乃時天智帝
いつくしみましくて只皇子と同じく岡本宮にしてく成長なさしめ出家し
玉ひて後高名の智者となり入唐し熟学し帰朝の後大和国におゐて
龍蓋寺 龍門寺 龍福寺を造営し大宝二年僧正に任じ神亀五年
十月に入寂す 禮部に勅して喪事を監護させ玉ひし 釋書
本尊は如意輪観世音なり 此仏胎に籠らせ給ふ小佛は孝謙帝の御念
持佛にして唐土楷首君の作一搩手半二臂如意輪人身除厄の観音
なり 中興弘法大師三國の土をもつて丈六二臂の像をつくり彼の小佛を佛
胎に収めて入寂 初号削道鏡此寺に住みし時楷首君父の命にそ
むき害せらるゝ事をのがれ逃のびて龍蓋寺に入杦の林に隠るゝ道鏡が曰
是楷首君が厄災にかゝるの卦ありまさに如意輪を作りたてまつるべしとて命をと助
念佛を作りて其難を免る道鏡此尊像を大に尊崇して孝謙帝にまいらす

其後伽藍を造立し彼の尊像を安置し此月初午日天皇行幸ありて
く落慶の式あり 又拾芥抄曰丈六の土佛は弓削法皇の造立にして其
より火災上なしらしく又除厄しの人多く像のうしろにあ
へまり 奥院の霊石は弘法大師龍神を封じ給ひしなり 忽清泉洋々
として盈満せり 諸人これを天の雫とて厄疾をのがるゝとぞ
後園 続世佳曰高市郡飛鳥の鎮池のかたはら小林の茂中といふ 撰集抄通要
云々是を信用せざるといへり 拾要抄曰橘寺の良十余町ばかり小原と
いふ所その 聖徳太子十一歳にして童子達二十六人を誘引したまひて後園に
あそび出られ詩賦のあそびありし童子等は遥にとおりあそびまうでしよし
さらしく句句を綴しめし人皇子はみなうちにて我父母にむかひ給ふ此は
顔に背りしが其親を稀なるの難あるをつくりとまりたまりなり太子
其時のそく論ずしめいばといへりかし天皇 用明帝 我児聖人なりし
とは争かくるやありしが微笑ありしを妃に申させてよ喜び
ありしとなん 平氏

逝回丘
風雅
旅人のゆききれ居る
名のみしく
花にちぢ彼る
去の木れな
為家

遊田丘 岡飛鳥二村の間にあり

万葉 明日香の遊田岳の秋萩は今日ふる雨にちりかすぎなん　丹比真人

続古今 行人のゆききの岡も白妙のあとをさへこそ消や失かむ　家隆

新後撰 飛鳥川ゆききの岡の葛かづらかへしや人はおもひ恨みむ　普光園入道前関白左大臣

岡本宮 舒明天皇の皇居なり又斉明天皇も岡本宮に遷て給ふよし日本紀にみえたり 王林村小字岡本と云へ橋本のひがし遊田岡に近し遊田岡ハ今の岡寺の北に礎のこれり

治田神社 岡村にあり今八幡と称す

遊岡 桜井に遊田岡と同所歟 大和志高市郡文苑の条に載ス未考

夫木 笛吹の社の神はまさくに遊の岡やり通ひけん　大納言之任

倭彦命墓 輪口村に窟あり 一丈四方あり 人皇十一代垂仁天皇の母后の御弟なり同御宇廿八年十月にかくれさせ給ふ十一月身狭桃花鳥坂の陵にはうむり其時近侍の人々を殉死として生ながら陵のめぐりに立うづみしに久しく死ずして朝夕に泣悲む声を聞かし天皇これを聞召ていたく御心に悲傷し是いにしへの風俗なりといへども不善なり後年止むべしと勅して詔したまひき　日本紀

思劉 思肉几 倭彦命の陵より西なる田の中にあり是即石槨にして石蓋あり世の人おほやけどかうべいふ大和志曰倭彦命の墓石槨窟中方丈余あり大石五片を以て之を作る磨礲精功にして今半は毀る石槨石蓋路傍に棄てあり土人思劉思肉几とよぶ

檜前川 前を隈ともいふ源は高取山より出て檜前を歴て真弓に至て真弓川といふ

亀山殿七百首 駒とめてなほ水かはむうちつくる檜隈川の水の白波　御製

古今大歌所御歌 さゝのくまひの隈川に駒とめてしばし水かへかげをだにみん

続後撰 駒とむるひの隈川の底清み月さへ影をうつしけるかな　権中納言長方

玉葉 駒とめてかげみし水や濁るらんひの隈川のさ月雨の頃　中臣祐成

於義阿志神社 檜隈村にあり 僧舎を道興寺といふ 檜隈大根田二村の氏神なり神名帳出

欽明天皇陵 平田村にあり 俗に梅山といふ陵考図之 字は鐵砂山 高サ凡丈余 周根凡三十丈 同所礫を以て陵上を葺けり 此陵の南経に土人いふ山に石仏の四躯あり内二躯は首あり又二躯は膝の傍まで面貌のさまなどのありさま不分明なり四軀九面あり元禄十五年十月八日平田村池田といふ所より堀出せし石像なり面貌像の面がはりよく堀出しの山王権現と称し是妄説俗説なり只これを見らるべし門郡高取山乃

倭彦命窟(やまとひこのみことのいはや) 土人武烈の窟(いはや)といふ
鬼厠(おにのせんちん)
鬼肉几(おにのまないた)
亀石(かめいし)

奥壺坂ゟ奥院に五百羅漢の石像あり是ハ其始め高取山に塁を城しける比
諸方ゟ大石運送に人多く死ル故に石塁成就しける後又此役夫の石工らか
為に壺坂の観音に立願し終に功成せり此乃大悲擁護の加護によつて其
願の満しぬれバ故百の石工各一躰二躰を彫造し巨巌の面に羅漢を
彫けるもあり然則ち此四躰も其時彫造せしものなりと伝へ又
あるハ初て造りかけし像ありて捨置しものもありとぞ但谷の方に
意に叶はざるゆへ捨置しものもありとぞ又石像のなりしを不残造
なりて悉く佛躰成就のものにありけるに新たに平田村池田の土中より
久しく埋もありしを近き頃中穿出し此梅山にもち来る乃
因縁を物がたるものなりとぞ

文武天皇陵 平田村の西にあり俗に中尾の石墓といふ 陵圖考曰 字ハ高松山高サ二間二尺廻り二十間

子島神祠 小島村にあり今王日と称し 土佐村と共に氏神とし 三代実録出

霊鷲寺 清水谷村にあり桃源山と號し 越智家数の墓あり

高生神祠 高取の山上にありしを天正年中清水谷村に 移すと三代実録出

壺坂山南法華寺 清水谷村の東 壺坂山にあり 本尊ハ千手観世音にして開創ハ
弁基の道基上人なり 於 此上人ハもと元興寺の僧侶にて智徳名誉
世にすぐれ大宝三年の比がこの山に光明赫々たり上人これをあやしミ
み此霊地なりとよりし日夜霊應を祈りてかのひかりの本を尋ね時
千手の相を現し千眼光を放つ 依って上人歓喜のあまり自ら所持の尊像を
安置し水精の壺に納め安置し元正帝是を聞召て大に叡感ありて詔
ありて大士の円證八葉の蓮華を表し八角の殿を建営し其外禮堂
寳塔鐘楼経蔵悉く建立ありと又一説に元興寺の海弁僧正の開基とも
いふ 伽藍開基記 又大宝三年に佐伯姫足子の尼若心建立すともいふ 帝王編年記

鎮守祠 龍蔵権現ハ吉野川赤根の淵より出現しあり龍神なりとかや

五百羅漢石 两界曼陀羅石 壺坂より八町ばかり東に高取山ありて 巨巌ありて石面に彫つけられたる壺坂
奥院ハこれより少し山のうへにあり真興上人建立して縁起に見へたり
傍に石燈籠あり 勅曰慶長十一年本多俊政創立ここ

鷹鞭山 土佐町上方にあり今ハ高取山といふ 山嶺峭抜として一郡の主山とす
相模家集
狩人のとられ日ありとも鷹鞭の山方維子をとりこそしつれ

高取山城 土佐町より登る事五十余町あり坂路羊腸として是要害の地
南朝のころに築く北兵を禦ぐといへ

子嶋寺 高取山にあり小堂一宇ありしのみ亦聞山の旧名跡あり 元亨釈書曰天平宝
字四年報恩法師長岡宮の帝に親ある処なり叡感乃おもむき
伽藍を建立し一丈八尺の観自在の像を安置して子嶋寺と号せしむ其後法師
清水寺の延鎮と報恩法師と同人異名なりと釈書に見えたり

壺坂寺

秋さびし
なし今へ
石の佛達

蝶酔

竹取 今ハ高取と書り詞林採葉曰竹取の翁乃旧跡ハ大和国に竹取乃城とゝろしくきこへしことありとし人竹取翁の翁ハ後に

国大網の里に住し人なまとべ別の むかし竹取翁といふありけり

季春の月に岡よりのぼりくるに先けるに九人の仙女に

まどひたり翁

死なばこそあひみずあらめいきてあらば白髪子らにおひざらめやも

これをとめらのよめる歌九首あり 委ハ万葉集にみえたり

波多甕井神社 膳夫村にあり今ハ天照太神と称す神名帳出 三代実録出傍に清泉あり

佐田丘 佐田村にあり 重坂川 源は葛上郡よりながれ壺坂川と落合ひ檜隈川に入

名をしらぬ

跡うへてぞうふにゆんちゝ川にたえずこそあれをもとむてしこ

櫛玉命神社四座 真弓村にあり今ハ八幡と称す神名帳三代実録出 真弓丘 真弓村にあり

越野 越村にあり 真弓丘陵 越村にあり皇極帝の祖母なり

許世都比古神社 越村にあり今五光神と称す

齊明天皇陵 北越智村の東北にあり俗に升塚といふ

巨勢山坐石椋神社 古瀬村東南にあり今吉田と称す神名帳出 鳥坂神社 古瀬村の東にあり今ハ天照大神と称す

宣化天皇陵 古瀬村にあり陵考図云字ハこサンサイ山といふ周廻凡十二間廻り百八十七間池あり外に小塚みつ中に大なるものあり土人曰武内墓といふ

石椋小野 古瀬村にあり 牟佐坐神社 三瀬村にあり神名帳出

益田池 大和志曰弘仁四年堰其址北に池尻村南に檜隈あり三瀬村の西南の丘の上に碑の趾石あり俗に岩船といふ高二丈計縦一丈五尺横一丈二尺上に両方の孔あり盤一槽として碑身をおくべし其銘ハ釈空海性霊集に出たり

久米寺の西より見出山といふ所に益田池の跡あり遺址その西南につゝきて池尻村といふあり是より南に碑を立てる其石今にのこれて池尻よりこゝそ半里ばかりの間むかしハ池なりし碑銘に広大の池と云としも見ひぬるなり今ハ僅にのこりて芝生となるむかしの池の岸とおぼしき所に弘法大師の建給ひし碑の跡石あり碑ハ初しろの代みいかなる人の外にうつしけん其由縁をしらず其碑文世に行はれて今見るに至て縦横放蕩なる大字なるもめづらしく試にこれを連続して見れバ許多の大碑なり

一説曰益田の碑石ハ高取城の石垣に積込ありしと古人伝へり是を去し几七里ばかり山城のかたに移しといへるも知るの事し断碑の趾を鍛上の代に数せんや

益田岩船

春もまだあさくみえたは
深山の花乃かほり
散のこりし岩ほに
咲乱るし花　里人
七岩船のうへ
風はんくは論を
あわれ日の　ますひ
海棠の花の
緑むすびあいらし
梢の初舞に
おもしろさ乃も
一興とやいはん

益田の池は村井と云り此池は漢直の舊宅なり嵯峨天皇旱に
田畑の損ずるを愁ひたまひしかば弘仁年中に大和守藤原朝臣進王
紀伊守末等此所の地理佳きによりて池を堀らんことを奏
しけれどもやがて勅許ありしより紀末等直円律師をして池を
堀らせらる大伴参議國道和州太守藤廣をして池の撿校職に補せ
られける或人旱魃といへども田を益の功ありしより益田池と號
せられたるとなん云伝へたる

金葉

波まくらいかにうきねをさだむらん氷益田の池のをしどり　斎宮内侍

續千載

思ひのみ益田の沼にねぬなはの絶ぬ契ぞくるしかりける　俊成女

新續古今

思のみ益田の池の水まさりしらぬねおやおの袖よ礼住く　順徳院

益田池碑銘曰

大和州益田池碑銘 并序　并沙門遍照金剛文并書

若夫感星銀漢下灑之功深湖水天地上潤之徳普故能中卉因之而
鬱茂蠢卵頼之而長生至若八氣播殖五戈陶冶北方之行偏居其最
坎之爲徳遠矣哉皇矣哉粤有益田池兩尊皇子之洲八鳥初導之國
地是漢謡之舊宅号則村井之故名去弘仁十三年仲冬之月前和州
監察藤納言紀大守末等慮九陽之可已歎膏映之未開占斯勝處奏
請之綸詔即應爰則令藤紀二公及四律師等叔功未幾皇帝遊焉汾
襄藤公從之辞職紀守亦遷越前　今上膺堯揖讓馭舜寶圖照三嶋
乎二儀撫赤子於八嶌繭伴平章事國道代撿國事並抜藤廣任判史
兩公撿校池事於焉青鳬引塊數千之馬日聚赤馬驅人百計之夫夜
集既而車馬轟々而雷往男女磤々而雷歸土雰々而雰積堤倏忽而
雲騰宛如靈神之挺埴還疑洪鑪之化産成也不日畢也不年造之人
也辨之天也爾乃池之爲狀也龍寺右鳥陵大墓南聳畝傍北峙米
眼精舎鎮其艮武遊荒壠押其坤十餘大陵聯綿虎踞四面長阜邐迤
龍臥雲蕩松嶺之上水激檜隈之下春繡映池觀者忘歸秋錦開林遊

人不俟、鴛鴦鳧鴨戯水奏歌玄鶴黄鵠遊汀争舞亀鼈延頭鮒鯉掉尾
淵獺祭魚林鳥反哺泊如積水含天疊山倒景深也似海廣也超淮笑
昆明之非儔哂槫莛之猶小虎嘯鼓濤則驚沃沃濆龍吟決堤則客與
不飽襄陸之罔象不得溢其塘樵山之女懟不能凋其底六郡蒙潤萬
澮湯々一人有慶兆民頼之舞之蹈之詠千箱以撃腹乎之足之唱萬
歳而忘力歎蒼海之數變索銘詞乎余筆貪道不戈當仁固辞不能謀
虚吐章洒為銘曰

希夷象帝　丨一未萠　盤古不出　國常無生　元氣倏動
葦芽乍驚　丶風扇鼓　五才縱横　日月運轉　山河錯峙
千名森羅　萬物雜起　藤麿既隠　稷杭爰始　天地人地
灑霑功似　前尭後禹　慮厚恤人　智略廣運　慈悲且仁
機事不測　成功若神　潤物如雨　榮人似春　綸綍雷震
有司創功　紀藤雄草　杲續圓豊　伴相施計　原守在公
良才奇術　民㒵飈風　爰有一坎　其名益田　堀之人力
成也自天　車馬霧聚　男女雲連　歸来似子　畢功不年
深而且廣　鏡徹紺色　混瀁瀰㳽　瞻望罔極　百溪之宗
萬派之職　魚鳥涵泳　虬龍斯匿　昳澮汎溢　畄畬播殖
孳孳我執　穟々我穡　如坻如京　足兵足食　井田我事
堯帝何力

觀鵞百譚云益田池の碑銘の真跡ハ讃岐國にありしといへり今換しく伝ふる足うりしも弘法大師高野山明王院にもありて此模写し互に違ふ所あり大抵印本のごとくしといへども文字異同あり

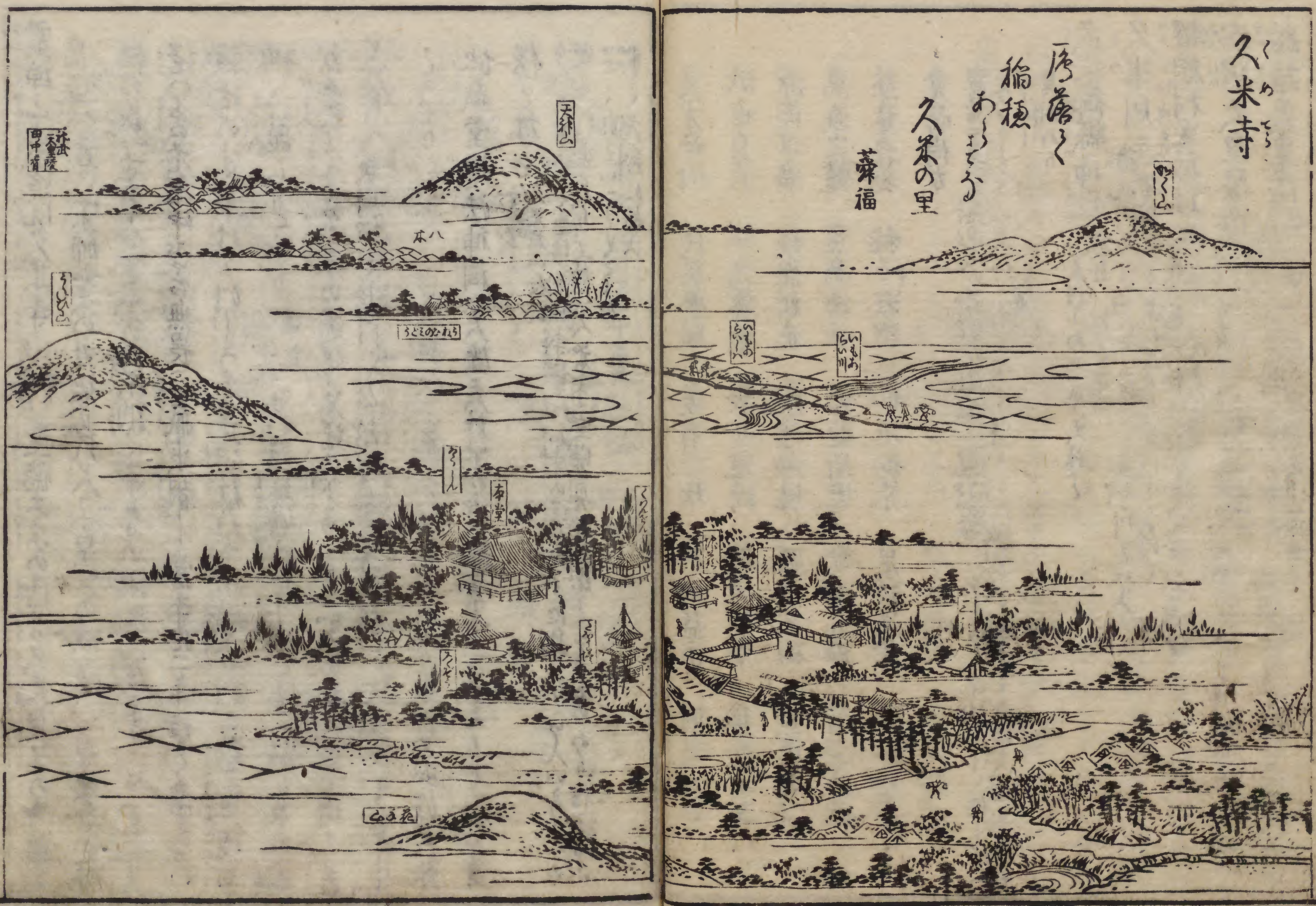
久米御縣神社 久米村にあり今天神と称す 神名帳出

久米川 檜隈川と云て三瀬ハ逕て久米に至り久米川となづく眞弓川とも云

輕樹村坐神社 神名帳出 此所の慶邑輕子村にあり今社廃し

安寧天皇陵 吉田村御陰井の西小の丘にあり祠あり 字ハ安寧といふ人傳に御陰井あり東南にあり

綏靖天皇陵 慈明寺村の東南の丘にあり俗に王將塚といふ人陵の南に仏人塚あり陵考曰陵の高サ二丈向廻九十八間


久米寺
久米の里
本堂

靈禅山東塔院久米寺（久米村にあり）聖徳太子の御弟久米皇子の御願にして本尊ハ薬師如来の丸像長八尺ハ久米皇子の感得なり尊像ハ薬師佛の長一寸五分黄金の壺に納めて本尊の佛胎に安置し給ふ多宝塔ハ善無畏三藏来朝し當寺に三年住して南天竺の鐵塔の半分をうつし給ふ其心柱乃下に佛舎利三粒大日經七軸を籠らせ給ふ　仏法伝通記　其後延暦十四年弘法大師夢の告を蒙つて久米の道場東塔の下にして此七軸の經を得給ふとなり

又或人云　中古名来目寺を弘法大師久米寺と改字せしとぞ　東堂ハ善無畏三藏弘法大師の由縁で安置す其外地蔵堂護法神祠ハ天満天神を祭る緇素十二家ありて社寺を持と称す（久米村に住して妻帯あり）

今の多宝塔ハ近頃泉師寺の修造なり仁和寺の塔を以て造に擬したりといへり一の礎石残て遺れり又世に久米寺宝塔真柱の銘とて伝ふるあり信ずるにたらずといへども爰に載て考證に備ふ

久米寺寶塔中真柱銘（一作迷體二）（一作幽昔）（一弘二作孤）

月九中岸開居一一露五迷體弘身一一法

一不一隨一一一道一不一一時首一一

或曰空海之手蹟而高野山妙瑞和尚爲之附訓云云

今昔物語云今ハむかしおのゝえのしんによ帝内裏を大和國高市郡に造営しことまへ人に國の中に丈夫を催して其役しけるに久米の仙人といふ者あり行事官の寮ありてみくるに彼か何か仙人と(?)いふ者ありて曰此者は久米といへる仙人の年當國吉野郡龍門寺に籠て法を行ひて仙となり空に飛行しけるが吉野川の邉にて女の衣を洗ふ脛の白きを見て心けがれて其女の前に落たり其女を妻として今に俗人にてありそれより仙人とはいふなりと行事官等これを聞てさらば仙人なるべしたゞ人にハあらず其時の材木をば定て空より運ぶべしと戯れいひけるを久米聞て我仙法を忘れて年頃になりぬされども本より仏法を行ひし身なれば若やと思ひて一心に祈念せんとて七日七夜行ふに八日の朝に空くもり雷雨して材木南の山より飛来りて造営の所に至りぬ行事官等これを見て貴み尊みて天皇に奏し久米に田三十町を給ひけり仙人悦て此田をもて寺を建つ今の久米寺是なり昔久米仙人の落たる所ハ今久米村に華洗芝あり是女の居し所といへり

釋書曰

久米仙者和州上郡人入深山学仙法食松葉服薜茘一旦騰空過故里會婦人以足踏浣衣其脛甚白忽生染心即時墜落

つれ〳〵艸云

久米の仙人のもの洗ふ女のはぎの白きを見て通をうしなひけんはまことに手あしはだへなどのきよらに肥あぶらつきたらんは外の色ならねばさもあらんかし

鬼頭田 高田丘の西に石多く化したる頭二ツ田の中にありそのかたちさまざまなるゆへ一ツはそのむかしも今もかはらず炎王の顔に似たり一ツは法師の頭なりといふ西の岡のうへに俗に耳無の池といふありいにしへより水たへずへだたりいにしへ陵の石櫃の蓋なりとぞ耳無の池と十市郡耳成山の麓にあり是ぞもとは同じ所なりといふも□□ゆへに水乃ことへ

畝火山 畝傍村の上方にあり大和志曰巋然として特立し

淡峯縁起便蒙曰 畝火 畝傍 雲飛 雲根火 八木村の南一里許 俗に慈明寺山といふ

大和三山の一也山に神功皇后の廟あり

万葉 思ひあまりいともすべなみ玉だすき畝火の山にわれしめゆひつ

家持家集 あけぼのに鳴なる鳥の畝火山峰のあたりに雲のかかれる

畝火山口坐神社 むかしは畝火山腹にあり今山頂に遷して祭る所 神功皇后 又は畝火明神ともいふ 神名帳に延喜式祭所に出る 宮寺は國源寺といふ人西の麓に神祠の址とて石あり今も御旅所といふ 又山腹に馬繋と云所あり。畝傍。大谷。吉田。慈明寺。山本。大窪。四條。小世堂。 右の氏神なり毎歳二月初日霜月初子日掛例往結社より禰宜一人 士持一人僕二人馬一疋にて牽来て此山の土を取て舊例とす 行ひし代より始りしといふ也 此山巌石多く砥石出る又巌の隙より陶器出る雨後に人多く拾ひ取るこれは太古製造のものにあらずや 又天造のものにあらずといへども 岩堅くしてくずれず かたちも全く形勝なるは なく かりにも欠損して全きものはなし

按是則いにしへの埴輪の類なるべし 往昔此地に萬願寺といふ大寺ありて四十二院ありしといふ 其跡礎石多し

懿徳天皇陵 畝傍村の西纖沙溪にあり祠廟は村の東北にあり字はヘイトク ノ宮陵考圖云高五丈平芝廻四十五間 埴廻四十二間此陵の西に小荒陵あり池尻村に属す 傳云皇后の陵と云

娘子塚 大久保村にあり むかし此所に娘子あり容顔美艶にして加多の人道路に顧て賞するを見て櫻児といふ又二人の壯士ありて是を争ひ 婚を求むに誂て死を貪て相敵す 娘子これを歎て いひけらく古より今に至るまで一女二門に適くことを聞ず今わが身を以て二士の意を和平がたし死して相害を永く息んと林中に入て樹に懸て縊て死す萬葉集に見えたり 摂州菟原郡に求女塚と云所あり 事實

大窪廢寺 大久保村に址あり釈迦堂是なり此名は 須广明石名所圖會に出る これは相似たり

高市御縣神社 東金堂 西金堂あり

井谷井 四條村にあり今高縣宮と称す 神名帳に代実録に出 弘法村にあり 御陵山 山本村にあり神武帝の皇后 小祠あり綏靖帝の兄なり 九旱に竭せず 神八井耳命の墓之 なくなりしといふ

天満上

長寳寺

神武天皇陵 四條村にあり祠廟ハ大窪村にあり陵考曰字ハ塚山といへ所 畝傍山の東北之高七尺八根廻二十間頂三十二間延喜諸

陵式曰 畝傍山東北陵 畝傍橿原宮御宇 神武天皇在大和國高市郡兆域東西一町南北二町守戸五烟

古事記曰 畝火山之北方白檮尾上 性霊集益田池碑銘序曰 畝傍北峙

前王廟陵記に 畝傍山ハ今かし原の西南六里久米寺の北にあり俗にいふ慈明寺山是也 東北の陵ハ百年前これが壊して糞田とす民其田を呼んで神武田と字す是を暴汚とかなしく痛哭たへさるもの多く数畝が餘じく一封として農夫これに登るに恬として怪とせずこれが観にたへんで寒んせざらんやと夫神武天皇ハ神代草昧の蹤を継東征して中州をたひらげ四門を闢き八方を朝せしむ王道の興治教の義實にて小劍ハ我國の君臣億兆に至るまで尊信いたすべき廟陵なり

日本紀曰神武天皇御宇七十六年三月橿原宮にして崩じたまふ壽齢一百廿七歳 翌年秋山陵にをさめまつる 古事紀御年百三十七

宗我都比古神社 曾我村にあり今入鹿宮と称す 神名帳三代実録出

蘇我の河原 蘇我川北にありて此上ハ我宿といふ所なりかくかくの河原今ハ曾我といへり 是ハ蘇我臣の家地といへり 蘇と宗と通ひ用るなり 類聚國史萬葉集等に宗我ともかけり

万葉 眞菅よし宗我の川原に鳴千鳥まなしわがせこ吾こふらくハ

小綱村 此所ハ新家村といふ 初瀬街道なり 明暦万治の頃此所に須城郭ありしが今ハ没くなりし

天高市神社 宗我社の南にあり今高市八幡と称す 神名帳三代実録出

万代 ありさりし昔ハ見ねとたけちの宮に月の[illegible]

地黄村 此所地黄出る上品とす

人麻呂祠 地黄村にあり傍に池あり池中にせまき嶋あり櫻樹数株ありて花の比ハ人麿ハ嶋しくは櫻乃下に石彫の像ありきるものなり 玉峰 詠 明神の勅詔せり

玉葉集 称なき人麻呂墓ありける所に柿本明神にまいりて讀侍ける

古への名の昔の下まで跡をばおもふ心のあとを見んとや 寂蓮法師

金橋宮 曲川村にあり安閑天皇の皇居の地也 日本紀出

太玉命神社 忌部村にあり 神名帳三代実録出

川俣神社 雲梯村にあり今ハ股八王子と称す 神名帳三代実録出

穪代坐神社 常門村にあり今ハ天神祠と称ふ社名帳ニ代実録出 天神祠 根成柿村にあり社前石燈籠に建武二年と刻む
長法寺 常門村にあり寺前に石燈籠あり勅曰正和五年施入於長法寺 法器山寺 在所不詳日本霊異記出
菅丞相山荘 在所不詳 昌泰元年十月廿五日太上天皇 宇多帝 御鷹狩に吉野の宮瀧に行啓ありて給ひしに貞数親王 清和帝第八皇子 右大将菅原朝臣 小野大弁 其外上下の侍者廿二人供奉す御門つくり上皇寮馬にめしてて道をいそかれまして御巡狩のしるしにハ素性法師前駈つかまつりける廿二日とうへに高市郡右大将の山荘に御一宿ありしなと給ひて和哥ありし事帝王編年記にみえたり

大和名所圖會巻之五 尾

内閣文庫
日本政府圖書
紅葉山文庫（蔵書印）

国立公文書館
National Archives of Japan